

第 20 回作業科学セミナー抄録

(2016 年 12 月 3 日 - 4 日, 東海市芸術劇場にて開催)

第 20 回記念講演

日本の作業科学の歴史と私の作業 吉川 ひろみ 85

佐藤剛記念講演

生きているシステム「複雑系」としての作業—作業を受け止める前提— 酒井 ひとみ 87

特別講演

人の交わりから生まれる地域づくり—コミュニティカフェの視点から— 倉持 香苗 89

基調講演

作業のレンズで社会の課題を捉える：作業的公正と作業権の継続的な対話への誘い エリザベス タウンゼント 91

テーマ演題（口述発表）

元プロサッカー選手の作業的移行支援のための探索的研究 金野 達也, 他 93

介護老人保健施設入所高齢者の施設環境と作業的公正の関係 真田 育依, 他 94

～ 要介護2の女性入所者の語りから理解できること ～

家のなかの「平和」を築く作業 ～妻と暮らす脳卒中者のセルフ・コントロール～ 藤原 瑞穂, 他 96

一般演題（ポスター発表）

臨床実習における作業療法学生の主観的経験：最後まで生き残るということ 田中 義徳, 他 98

作業形態の再考 高島 理沙, 他 99

Co-occupation としての作業療法におけるクライアントと担当作業療法士の相互理解のプロセス 坂根 勇輝, 他 101

障がい者にとって活力ある社会とは 上村 麻美, 他 102

ものづくりを通じた地域の作業と場所の創造 高木 雅之, 他 104

プレイバックシアターが大学生の自尊感情と自己効力感に与える効果の検討 黒瀬 亮太, 他 106

南カリフォルニア大学での 4 週間が私に与えてくれたもの 新谷 眸 107

作業ストーリーを通じクライアントが主体的に作業に取り組めた事例 富高 史裕, 他 109

院内クリスマスコンサートにまつわる作業の意味
：作業的公正の可能化に向けた病院での実践 大下 琢也, 他 110

作業中心の実践が有益だった急性期脳出血を有する個人クライアント 池内 克馬, 他 112

ゴミ袋の名前書きにより作業的ウェルビーイングの経験を促せた事例
～認知症を呈したクライアントとの関わりを通して～ 有賀 康大, 他 114

身体障害者における退院後の調理の意味の変化 清田 直樹, 他 115

急性期病院における在宅復帰予定クライアントが感じる作業遂行と「リハビリ」に対する作業的見解 -SOPI の評価から作業的不公正を考える- 安田 滋至, 他 117

日本の作業科学の歴史と私の作業

吉川 ひろみ (県立広島大学)

Hiromi Yoshikawa (Prefectural University of Hiroshima)

1995 年 12 月, 作業科学をテーマとした日本作業療法士協会全国研修会 (札幌) とプレワークショップが開催され, 1997 年からは毎年, 作業科学セミナー (第 1 ~ 9 回) が開催された.

回 (場所)	主なプログラムと講師 Main Programs in Occupational Science Seminars	
1~3 (札幌)	Florence Clark と Ruth Zemke による講義	
4 (札幌)	Ann Wilcock による講義	
5 (札幌)	医療人類学の立場からみた作業科学への提言: 質的研究をめぐって (波平恵美子) The suggestion for occupational science from medical anthropology USC における作業科学研究の動向と日本における作業科学研究の将来展望 (Ruth Zemke) Occupational science research	
6 (札幌)	文化人類学と作業科学 (松岡悦子) Anthropology and occupational science 医療人類学と作業科学 (道信良子) Medical anthropology and occupational science 国際的作業科学 (Ruth Zemke)	
7 (札幌)	テーマ: 日本の作業科学を展望する 特別講演: 国際的作業科学の発展 (Ruth Zemke) The development of international occupational science	
8 (三原)	第 1 回佐藤剛記念講演: 時間と場所と作業: 私たちの生活のとらえ方を形作るもの (Ruth Zemke) Time, Space and Occupation: Interactions Shaping our Perceptions of Life	
9 (浜松)	第 2 回佐藤剛記念講演: 作業とは何で, 何の役に立ち, どのような意味があるのか? (吉川ひろみ) What is the form, function and meaning of occupation?	基調講演: 作業科学の過去, 現在, 未来 (Ruth Zemke) Occupational science: Past, present and future

2006 年に日本作業科学研究会が誕生し, 作業科学セミナー (第 10 回~) が継続した.

回 (場所) テーマ Theme	佐藤剛記念講演 Tuyoshi Sato Memorial Lectures	基調講演 Keynote Lectures
10 (大阪) 作業と可能性 Occupation and possibility	作業科学: 佐藤剛が手渡したかったもの (小田原悦子) Occupational science: Tsuyoshi Sato's gift to Japanese occupational therapists	作業の研究はなぜ学際的なのか (Ruth Zemke) Why the study of occupation is interdisciplinary
11 (岡山) 作業を世の中へ: 作業を捉え, 深め, 生かし, 見えるものへ Making occupation into the society	作業科学の系譜と今後の発展 (宮前珠子) Genealogy and future development of occupational science	メインストリームへ: 作業科学を見えるようにすること (Alison Wicks) Into the main stream: Making occupational science visible
12 (東京) 作業を考える第一歩 The first step for thinking on occupation	作業を行っている患者さまは元気: そのためには, 作業療法士は何をすべきか (中村春基) Clients who doing occupation are fine	アストリッドと日本の桜の木: 変容と作業に関する省察 (Josephsson Staffan) Astrid and the Japanese cherry tree: A reflection on transformation and occupation
13 (福岡) 作業科学の和と話と輪: 作業がつなぐ人・明日・可能性 Harmony, talk, and ring: link among people, future, and possibility	どのように働くことが健康を促進するのか-作業に関する社会的課題解決に向けた提案と実践 (港美雪) How can we facilitate health through work	作業科学のプロモーション (Jin-Ling Lo) The promotion of the occupational science
14 (沖縄) 結 (ゆい): 作業の花を咲	作業の知識を活かすこと, 産み出すこと: 1 人の作業療法士の経験	作業科学研究の現在と未来 (Clare Hocking) Current and

かせましょう Join: Let's make bloom the flower of occupation	から (村井真由美) Using and producing knowledge of occupation	future research in occupational science
15 (三原) 作業科学と社会 Occupational science and society	我, 作業する, ゆえに我あり (近藤敏) I do occupation therefore I am	作業と参加とソーシャルインクルージョン (Gail Whiteford) Occupation, participation, and social inclusion
16 (札幌) 作業科学からの架け橋 : 作業療法へ, 学際領域へ, 未来へ The bridges from occupational science	作業がつなぐ過去・現在・未来 : 障害を超えて生きるということ (近藤知子) Occupations connect the past, the present, and the future: The way of living beyond the disability	作業科学の構築 (Doris Pierce) Building occupational science
17 (福島) 作業科学からのメッセージ Messages from occupational science	作業を通して人を理解すること : 東日本大震災を経験してその重要性を改めて考える (齋藤さわ子) Understanding people through occupation: Re-considering of its significance by the experiences of the Great East Japan Earthquake	作業の理解: 作業療法に不可欠なこと (Helene Polatajko) Understanding of occupation: Imperative for occupational therapy
18 (山口) 作業科学とリーダーシップ Occupational science and leadership	作業科学における場所の再考 : トランザクションの視点から (坂上真理) Revisiting "Place" in Occupational Science: from a Transactional Perspective	リーダーシップという作業: 作業科学と差をとっての契機 (John White) Leadership as occupation
19 (浜松) Transition : 人々の生活・人生における移行と作業 Transition and occupation in human life	Transition : 移住, 教育, 就労を通しての考察 (浅羽エリック) Transition: Contemplations through illustrations of migration, education, and work	高齢期に意味ある存在を生きる (Jean Jackson) Living a meaningful existence in ole age
20 (愛知) 社会の課題を作業のレンズで捉える Perceiving social problems through occupational lens	作業の複雑系 (酒井ひとみ) Complex system of occupation	作業的公正 (Elizabeth Townsend) Occupational justice

作業科学に関連して生まれた私の作業や皆さんの作業について、プレイバックシアターの手法を使って共有したい。

略歴：国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院作業療法学科卒業。1995年より県立広島大学（当時広島県立保健福祉短大）に勤務。米国ウェスタンミシガン大学にて修士，吉備国際大学にて博士取得。担当科目は，作業科学，生命倫理学など。翻訳「COPM カナダ作業遂行測定」(大学教育出版) など，著書『「作業」って何だろう』(医歯薬出版) など。2006～2012年日本作業科学研究会理事，2014年より会長。2014年よりプレイバックシアター劇団しましま代表。

Profile: Hiromi Yoshikawa graduated from the School of Rehabilitation. She has worked at Prefectural University of Hiroshima since 1995. She earned the Master of Science from Western Michigan University and the Doctor of Philosophy from Kibi International University. She is teaching the courses such as occupational science and bioethics. She translated the Canadian Occupational Performance Measure and wrote What is Occupation. She has been the president of the Japanese Society for Study of Occupation and the representative of Playback Theatre Company C-ma C-ma since 2014.

生きているシステム「複雑系」としての作業 —作業を受け止める前提—

酒井 ひとみ

関西福祉科学大学

長年の作業科学ファンというだけで、佐藤剛記念講演という機会を頂戴したことを光栄に思います。

1979年に作業療法士養成校を卒業し、2年間地元の大学病院で急性期から亜急性期の身体障がいを経験後、国立身体障害者リハビリテーションセンターに12年間勤務、おかしく楽しく過ごしました。しかし、OTがわからなくて悩んでもいました。1990年に恩師の矢谷令子氏を囲んだ「作業療法を考える会」という勉強会をしました。1回目のテーマは、「なぜ、我々はOTの核は何かと悩んでいるのか？」でした。同時期にKJ法研鑽会（KJ法講習会参加者有志の勉強会）合宿でも「作業療法とはなにか？」をテーマにとりあげました。

1993年地元で養成校を開設、作業療法を次世代につないでいく責任が生じてきました。1995年OT協会主催の第1回指導者のための作業療法教育総論4泊5日の研修会（企画・運営・講師：山田孝氏・佐藤剛氏・宮前珠子氏）に参加し、作業療法の歴史を継時的に振り返ることで、OTには近隣職種と異なった哲学があり、作業療法士は独特の信念を持っていると分かりました。しかし、OT実践に対する需要が急速に拡大しつつある中、OTらしさを辿る術が学問的に等閑にされている状態であることも知りました。

ちょうどOTの独自性や学問的背景を明快に説明できないもどかしさを抱えていた私は、1995年全国研修会のプレワークショップ2泊3日（後に「第1回の作業科学セミナー」と位置付けられる）で「作業科学（佐藤剛氏はOccupational Scienceを作業学と訳して紹介、後に、作業科学とした）」と出会いました。講師は、作業科学（以下、OS）の第一人者のFlorence Clark氏（南カリフォルニア大学）であり、このワークショップにはRuth Zemke氏も同行していました。OSは、OTの歴史的背景を踏襲する形でOTの統一した視点を持ち、{作業が健康にとって重要であることが広く公に認知されて初めて専門職が評価される}という考え方のもと誕生しました。1989年に誕生したこの新しい科学は、OTの羅針盤的役割を果たすものと予感しました。

それ以来、OS関連のセミナーや研修会に参加したり、同志に支えられながら勉強会など継続的に行っています。質的研究の興味が高じて職業生活を中断して文化人類学の大学院に進学したりもしました。OSを知るようになって、OTに対する不透明感は和らぎました。OSによって、作業療法士のアイデンティティが明確になり、作業療法は、作業を支援することであると明快になったからです。一方で、OTに対する焦燥感が増してきています。作業のレンズを通してみると、作業療法士以外の職種が作業療法をして社会に貢献しているのが見えてくるからです。作業療法の作業とは何かということに作業療法士は真摯に向き合っていくことがますます必要な気がしています。

近年作業療法関連の研修会等で「クライアントの作業や作業ニード評価」について講演依頼をよく受けます。実際に、評価法の背景にある理論不在で評価法が迷走している場面に遭遇することも多々あります。背景の理論を理解する仕方を試行しているところです。ここでは、「作業を受け止める」前提となる理論や概念について取り上げようと考えています。作業を複雑系から捉え、クライアントの作業の受け取り方や支援に向けての考え方について述べたいと思います。

作業科学研究, 10, 87-88, 2016.

**Occupation as a Complex, Living System
- Prerequisites for Acceptance of Occupation -**

Hitomi SAKAI, PhD, OTR

Department of Rehabilitation Sciences, Kansai University of Welfare Sciences

It is my honor to be invited to speak at the Tsuyoshi Sato Commemorative Lecture.

It was at the 1st Annual Japanese Occupational Science Seminar in 1995 that I first learned about occupational science (OS). It was right at that time when I was growing frustrated with being unable to clearly explain the identity and academic context of occupational therapy (OT).

By adopting a unified viewpoint in a form that follows the historical background of OT, in which it is widely recognized that occupation is an important aspect of one's health, and for the first time putting it in context with evaluation as a specialist field, OS was born. I felt hope that this new field of study, which was created in 1989, could serve as a guidepost for building understanding of OT.

Since then, I have participated in OS-related seminars and workshops and carried out regular study sessions with the support of my peers. My interest in qualitative research continued to build, leading me to put my career on hold and enroll in graduate school to study cultural anthropology. By learning about OS, I was able to ease my uncertainties concerning OT. Through OS, the true identity of an occupational therapist became clear, and I came to understand that OT is meant to play a role of support with regard to a client's occupation.

However, the current state of OT is showing increasing disarray. This is because, when looking at it through the lens of occupation, there are specialists other than occupational therapists contributing their own forms of OT to society. I feel that it is becoming more and more necessary for occupational therapists to more seriously consider exactly what the work of OT is.

In undertaking this lecture, I came face-to-face with the concept of "occupation." Here, I shall delve into the theories and concepts that form the prerequisites for evaluating a client's occupation and that occupation's needs, a topic which generates many requests at workshops and other academic gatherings. I would like to, in the context of viewing occupation as a complex system, describe the concept of how to accept and properly support a client's occupation.

Japanese Journal of Occupational Science, 10, 87-88, 2016.

人の交わりから生まれる地域づくり—コミュニティカフェの視点から—

倉持 香苗

日本社会事業大学

本報告では、地域拠点としてのコミュニティカフェ注 1) に焦点を当て、地域に誰もが集える場所（例えば、高齢者・障がい者・児童というように利用者層を限定しない場所）を設置することの意義およびそこに常駐するスタッフのアプローチの重要性について論じる。そして、こうした場所が地域を基盤とした住民の主体的な活動の拠点として機能する可能性について述べる。

わが国の地域は希薄化し、これまで近隣で支え合ってきた関係が失われてしまった。例えば孤立死の問題は、地域において誰かと何らかの繋がりがあれば防ぐことができたのではないかと考えられる例が少なくない。また、複雑化・多様化した福祉課題を行政のみで解決することが困難になり、地域における住民の助け合いが求められている。さらに、定年退職を迎えた団塊の世代の自己実現の高まりと共に、彼らが地域で活躍することも期待されている。このように、希薄化した地域において人間関係を再構築することの重要性が指摘されている。

誰もが気軽に利用することができるコミュニティカフェは、子どもから高齢者まで、障がいの有無を問わず多様な人が交わることから、他者理解の場、情報交換の場、自己実現の場などの役割を果たしている。また、スタッフと利用者注 2) は、サービスを提供する側とサービスを受ける側という関係ではなく、共にその場を創り出すという関係であることが多い。すなわちコミュニティカフェは、利用者のみならずスタッフの自己実現の場になっていることも珍しくない。

これまでの研究において、利用者および地域に対するスタッフのアプローチの重要性が明らかになった。そして、地域を基盤としたコミュニティカフェは、コミュニティカフェ内部にとどまらず、コミュニティカフェの内部と外部すなわち利用者と地域を繋ぐ機能を果たしていると考えられた。

コミュニティカフェで出会った者同士がどのように知り合いになるのか。そして何故、誰もが利用できる場所が必要とされるのか。当日は、これらの点に関する報告を通じ、コミュニティカフェを拠点とした地域づくりの可能性について考えていきたい。

注 1) ここではコミュニティカフェを「飲食を共にすることを基本に、誰もがいつでも気軽に立ち寄り、自由に過ごすことができる場所」（倉持 2014）と定義する。

倉持香苗（2014）『コミュニティカフェと地域社会——支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践』明石書店。

注 2) コミュニティカフェでは、「利用者」のほか、「利用客」、「参加者」などと呼ばれている。

作業科学研究, 10, 89-90, 2016.

Community development occurring through interpersonal interaction: From the perspective of community cafés

Kanae Kuramochi

Japan College of Social Welfare

This work focuses on community cafés¹⁾ as sites for community interaction. This work discusses the significance of creating places where various members of the community can congregate (places where visitors are not limited such as "the elderly", "the disabled", and "children") and the importance of approaches by permanent staff. This work also describes how these places can serve as springboards for independent community-based efforts by local residents.

Community bonds in Japan have weakened and mutual support among neighbors has ceased. One example of this is deaths alone. In many instances, these deaths could have been prevented if the deceased was in contact with other members of the community. In addition, welfare work has become more complex and more specialized, but this work cannot be undertaken by government agencies alone. Mutual cooperation among residents of the community is needed. Moreover, the generation that is approaching mandatory retirement age needs greater self-actualization and that generation needs to be active in the community. Since community bonds have weakened, interpersonal relationships must be re-established.

A community café is a place where visitors are welcome and where various people, be they children, the elderly, or the disabled, can interact, so a community café serves as a setting for emotional support, a forum for sharing information, and a setting for self-actualization. Moreover, staff and customers²⁾ often create the setting together, rather than simply acting as service providers and service recipients. In other words, a community café is often a setting for self-actualization of both customers and staff.

Previous studies have noted the importance of staff approaches for customers and the community. Efforts of a community café are not confined to the café itself. Instead, a community café serves to link its customers to the community at large.

How do the people who met in community cafe for the first time get to know? Why is the place that is available to anyone required? These questions will be addressed in this work, think about possibility of the community development based in the community cafés.

1) Here, a community café is defined as “a place where one can go to partake of food and drink or wile away the time and where one may be readily approached by others” (Kuramochi 2014).

Kuramochi, Kanae (2014) Community Cafés and Local Communities: Social Services to Encourage Cafés and Communities to Support One Another, Akashi Publishing.

2) Customers of a community café can be referred to as “customers,” “patrons,” “visitors,” or the like.

Japanese Journal of Occupational Science, 10, 89-90, 2016.

作業のレンズで社会の課題を捉える： 作業的公正と作業権の継続的な対話への誘い

エリザベス タウンゼント

ダルハウジー大学 名誉教授, プリンスエドワード島大学 外部教授

社会の課題は、世界のどこにおいても我々を苦しめ得る。特に否定的な結果をもたらす社会の課題において、我々が新しい見識を必要とすることは明らかに思える。我々はまた、社会の課題により日々の世界で参加が他者より制限されるのはいつなのかを示し、人の権利のために立ち上がる必要がある。日々の不公正と、社会の課題により引き起こされる制限された人の権利について、作業のレンズで捉えるこの基調講演は、第 20 回日本作業科学セミナーの参加者を作業的公正と作業権 (Townsend & Wilcock, 2004) における継続的な対話へと導びくであろう。

作業科学研究, 10, 91-92, 2016.

The 20th Occupational Science Seminar, Keynote Lecture

Social Problems Through an Occupational Lens: Bringing Occupational Justice and Occupational Rights into the Dialogue-in-Progress

Dr. Elizabeth Townsend

Professor Emerita at Dalhousie University, Adjunct Professor at the University of Prince Edward Island in Canada

Social problems can overwhelm us everywhere in the world. It seems clear that we need new insights on social problems that negatively effect some more than others. We also need to name and stand up for human rights when social problems restrict participation in the everyday world for some more than others. With an occupational lens on everyday injustice and restricted human rights resulting from social problems, Dr. Townsend's Keynote Lecture will draw the 20th Japanese Occupational Science Seminar audience into the dialogue-in-progress on occupational justice and occupational rights (Townsend & Wilcock, 2004).
g population. Key references for those interested are:

Townsend, E.A. (2015). The 2014 Ruth Zemke Lectureship in Occupational Science. Critical occupational literacy: Thinking about occupational justice, ecological sustainability, and aging in everyday life, *Journal of Occupational Science*, 22, 389-402, doi: 10.1080/14427591.2015.1071691

Townsend, E.A., & Polatajko, H.P. (2013). *Enabling occupation II: Advancing an occupational therapy vision of health, well-being and justice through occupation*. (2nd ed). Ottawa, ON: CAOT Publications ACE.

Social problems can overwhelm us everywhere in the world. It seems clear that we need new insights on social problems that negatively effect some more than others. We also need to name and stand up for human rights when social problems restrict participation in the everyday world for some more than others. With an occupational lens on everyday injustice and restricted human rights resulting from social problems, Dr. Townsend' s Keynote Lecture will draw the 20th Japanese Occupational Science Seminar audience into the dialogue-in-progress on occupational justice and occupational rights (Townsend & Wilcock, 2004).

g population. Key references for those interested are:

Townsend, E.A. (2015). The 2014 Ruth Zemke Lectureship in Occupational Science. Critical occupational literacy: Thinking about occupational justice, ecological sustainability, and aging in everyday life, *Journal of Occupational Science*, 22, 389-402, doi: 10.1080/14427591.2015.1071691

Townsend, E.A., & Polatajko, H.P. (2013). *Enabling occupation II: Advancing an occupational therapy vision of health, well-being and justice through occupation*. (2nd ed). Ottawa, ON: CAOT Publications ACE.

Townsend, E.A. (2012). The 2012 Townsend & Polatajko Lectureship. Boundaries and bridges to adult mental health: Critical occupational and capabilities perspectives of justice: 2010 Townsend and Polatajko Lectureship. *Journal of Occupational Science*, 19(1), 8-24.

Stadnyk, R., Townsend, E.A., & Wilcock, A. (2010). Occupational justice, in C. Christiansen, C., & E.A. Townsend (Editors). *Introduction to occupation: The art and science of living*, 2nd Edition, pp. 329-358, Thorofare, NJ: Prentice Hall.

Nilsson, I., & Townsend, E.A. (2010). Occupational justice – bridging theory and practice. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 17, 57-63.

Townsend, E.A., & Wilcock, A.A. (2004). Occupational justice and client-centred practice: A dialogue in progress. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 71, 75-87.

Townsend, E.A. (2003). Power and justice in enabling occupation. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 70, 74-87.

Wilcock, A.A., & Townsend, E.A. (2000). Occupational terminology interactive dialogue. *Occupational Justice. Journal of Occupational Science*, 7, 84-86.

Townsend, E.A. (1996). Institutional ethnography: A method for analyzing practice. *Occupational Therapy Journal of Research*, 16, 179-199.

Townsend, E.A. (1993). Occupational Therapy's Social Vision/Notre Vision Sociale en Ergotherapie, Muriel Driver Memorial Lecture 1993. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 60, 174-184.

Japanese Journal of Occupational Science, 10, 91-92, 2016.

《口述発表》

元プロサッカー選手の作業的移行支援のための探索的研究

金野 達也¹⁾, 齋藤さわ子²⁾

1) 目白大学作業療法学科,

2) 茨城県立医療大学保健医療学部作業療法学科

1. はじめに

プロサッカー選手が引退後セカンドキャリアを獲得する事は、サッカーの代わりとなる作業を獲得する作業的移行として捉える事ができる。スムーズな作業的移行には、過去と現在の作業に結びつきがあるという報告があり、過去と結びつきのある作業に移行するように支援する事(以下、作業的移行支援)で、セカンドキャリアへスムーズな作業的移行ができる可能性がある。しかし、セカンドキャリア獲得に成功した元プロサッカー選手において「プロでサッカーする」と「現在の仕事をする」という各作業の意味や機能に結びつきがある事を示す研究はなく、支援の有効性は未知である。そこで、本研究では、現在のキャリアに満足している元プロサッカー選手の「プロでサッカーをする」と、「現在(サッカー関連)の仕事をする」意味や機能の結びつきを理解する事を目的とした。

2. 方法

研究協力者は元プロサッカー選手7名(年齢幅29～44歳)で、引退後5～19年経過しており、サッカー関連の仕事(監督・コーチ・強化部長等)をし、研究に同意が得られた人を対象とした。半構造化面接を実施し、ICレコーダーにて記録しデータを収集した(一人1回、時間は30～96分)。データ分析は、質的分析ソフトMAXQDAを用いて継続比較法で行った。①音声データから逐語録を作成し、②作業的移行・作業の意味・作業の機能に関連した表現にコード名をつけ、③類似したコードをカテゴリーにまとめ、④「プロでサッカーをする」と「サッカー関連の仕事をする」意味や機能のカテゴリー間を比較しながらその結びつきを検討し、⑤コードとカテゴリーに類似例や反対例がないかを検討し、一人目の研究協力者のモデルを作成した。①～⑤と同様の手順で、2人目以降もモデルを作成し、順次比較を繰り返しながら、全ての研究協力者の統合したモデルを作成した。分析は、部活動でサッカー経験があり半構造化面接を実施した作業療法士と、作業の意味や機能について理解しており、質的研究経験のある作業療

法士1名で行った。本研究は茨城県立医療大学の倫理委員会の承認を得て行った(承認番号620)

3. 結果

「プロでサッカーする」意味は、好きな事(語り例:好きな事をやってただけ)であった。「サッカー関連の仕事をする」では、好きなサッカーへの関与(語り例:サッカーに関わっていく仕事をやりたかった)、または好きな事(語り例:好きな事をやっている)であればサッカー関連でなくても良いという意味もあり、意味の結びつきが語られていた。「プロでサッカーする」機能としては、サッカーのプレー技術の維持・向上に加え、努力できる事(語り例:努力は普通, 当たり前)や仕事への責任感(語り例:責任ある行動をとる)などのサッカーのプレー技術以外の能力も得られていた。サッカー関連の仕事は、プロサッカーの経験は活かせるが、その仕事内容はプロサッカー選手とは似て非なる仕事(語り例:元プロサッカー選手だからといって指導が上手いわけじゃない)であると認識されていた。サッカー関連の仕事での成功は、サッカーのプレー技術以外の「プロでサッカーをする」で得られた能力も身につけていたからでもあり、また、その能力を「サッカー関連の仕事」に活かすことを通して、前職の「プロでサッカーする」とのつながりも感じていることが語られていた。

4. 考察

一般的に、元プロサッカー選手は、サッカー関連の仕事であれば、サッカーの技術を活かせるという理由で、良い作業的移行として認識されている。しかし、本研究結果から、サッカー関連の仕事であっても、プロでサッカーをする事とは似て非なる仕事であると認識されていた。似て非なる仕事であるにも関わらず、移行がスムーズであったのは、「プロでサッカーをする」と「サッカー関連の仕事をする」の間の意味(例、好きな事)の結びつきや、「プロでサッカーする」機能である、サッカーのプレー技術以外で得た能力が活かせていると感じられた事が影響している事が理解された。つまり、現役中からその人の作業の意味や機能を理解し、それがセカンドキャリアに結びつきやすいよう支援する事が健康問題なくスムーズに作業的移行することに有効である可能性があるといえる。全てのプロサッカー選手が引退後に、サッカー関連職に就けるわけではないので、今後はサッカー関連以外で仕事している人を対象に、理解を深める必要がある。

作業科学研究, 10, 93-94, 2016.

Exploration of occupational transition support for a former professional soccer player

Tatsuya Kaneno¹⁾, Sawako Saito²⁾

1)Department of Occupational Therapy, Mejiro University

2)Department of Occupational Therapy,
Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

1. Introduction

The phenomenon of former professional soccer players acquiring a second career following retirement from sport is considered an occupational transition. Previous studies indicated that a connection between past occupation and present occupations encouraged occupational transition. Therefore, a support program that connects the new occupation to the past occupation has the potential to be very effective. However, the connection between playing soccer professionally and having a second career remains to be not elucidated. The purpose of this study was to examine the connection between playing soccer professionally and doing a second career, from the point of view of occupational transition.

2. Methods

Seven former professional soccer players were included in this study. Semi-structured interviews were carried out and the data were analyzed using constant comparative analysis by MAXQDA. The data analysis was performed by two occupational therapists. One of the occupational therapists had experience related to playing soccer. Another occupational therapist had knowledge of occupational meaning and function and had experience conducting qualitative studies. This study was approved by the Ethics Committee of the Ibaraki Prefectural University of Health Sciences (No. 497).

3. Results

The meaning of playing soccer for professional athletes is in being able to do some of their favorite activities. The meaning of doing a career related to soccer is in participating in soccer and their favorite activities. These statements demonstrate the connection between playing soccer professionally and doing a career related to soccer. There is an occupational function in playing soccer for professional athletes, such as in making an effort and

having career-related responsibilities in addition to playing soccer. For careers related to soccer, the function is similar but not identical to that of a professional soccer player. Therefore, making an effort and having an understanding of work responsibilities are factors that should be used in order for a player to adapt to a career related to soccer.

4. Discussion

This study indicated that having a career related to soccer and playing soccer professionally are close but not the same. Despite this, the reason why the participants experienced a positive occupational transition was maintaining connections of occupational meaning and function between the career of a professional soccer player and a second career. Therefore, this study indicated that it is important to provide support based on analysis of occupational meaning and function.

介護老人保健施設入所高齢者の施設環境と作業的公正の関係～ 要介護2の女性入所者の語りから理解できること ～

真田育依, 齋藤さわ子, 伊藤文香, 水野高昌
茨城県立医療大学

はじめに：作業的不公正な状態は人の健康に悪影響を及ぼすことは知られている。また、介護老人保健施設入所者は作業的不公正な状態にある可能性が指摘されている（小林ら, 2002）。しかし、どのような入所者がどのような作業的不公正状態にあるのか、何故、作業的不公正状態が生じるのかに関する研究はほとんどなく、どのような対策が中間施設と位置づけられる施設入所者の作業的公正を促進・維持するかの手だてを検討できる知見がないのが現状である。

目的：老人保健施設に適応的に生活していると考えられる2名の女性入所者の作業的公正状態と施設環境との関係を理解すること。

研究方法：情報提供者はA施設に1年9ヶ月間入所している70歳代後半の女性の安藤さん（仮名）と、B施設に2年1ヶ月入所している70歳代後半の女性の猪俣さん（仮名）であった。2名とも要介護2であった。手段は、半構造化面接を用い、面接はICレコーダにて記録した。尚、施設に研究の協力の依頼を行い同意

を得た後、施設スタッフに情報を提供してくれそうな入所者に声をかけてもらい、研究説明を受けても良いと伝えてくれた入所者に研究者から正式に研究説明を行い同意を得た。データ分析は、面接で収集したデータをもとに逐語録を作成し、セグメント化、コード化したのち、サブカテゴリー、カテゴリーを作成した。さらに、カテゴリー同士の関係性を概念化するといった流れで進めた。尚、全ての過程において作業療法士であり質的研究の経験がある作業科学研究者と共に検討した。本研究は所属機関の倫理審査で承認された。

結果と考察：施設での作業を遂行、希望するまでのプロセスの背景には、《以前の生活における作業の特徴》と《施設に対する認識》が関係していた。《以前の生活における作業の特徴》では、安藤さんは、「家事はやらなくてはいけないこと」と家事を義務的に捉え、自分のやる気の有無で作業を選択するような生活はしていなかった。一方猪俣さんは、「大好きな家事」「趣味を行う」など願望的作業を多く行う生活をしていた。また、両氏共に、《施設に対する認識》において、「施設は楽」「施設は安心するところ」という考えと「施設には制限があるがそれは当たり前」という認識を抱いていた。また、「少なすぎる施設での作業」と思いながらも「今の自分には適切な施設での作業」といった、作業的公正かどうかの判断を本人が認識できていない状態にある可能性が示された。

施設での作業を遂行、希望するまでのプロセスでは、共通して《実現しない自宅復帰》があり、「何もなくてもよい」という施設生活の背景のもとに、「家事の困難さ」等の自宅復帰に必要な作業に対する困難さを感じながらも「練習のなさ」、猪俣さんの場合は更に「練習の禁止」「不十分な支援」といった環境にあるために「やらないことで低下する意欲」に関係していた。さらにはそのことが「自宅復帰への迷い」「自宅復帰への諦め」につながり、不安感や不全感を抱きながら生活することにつながっていた。また、《実現しない自宅復帰》により《施設内で充実して暮らすための作業》を模索していた。『施設生活での楽しみの希望』には、「イベントの回数増加」や「自由な外出や買い物への支援」「音楽的なレクの実施」などが語られた。また、それが『実現しない理由』として「スタッフの人数の限界」「スタッフの時間の余裕の限界」「行く場所がない」といった人的および物的環境の制限や「家族への遠慮」といった本人の周りへの気遣いが語られた。

結論：介護老人保険施設は自宅復帰を目指す中間施設として設けられているが、本研究の情報提供者にとっては、自宅復帰に必要な作業の練習ができない環境であり、その環境が継続することで、その作業に対する意欲が低下し自宅復帰に迷いが生じていた。このことは、自分の能力に適した作業選択が自分自身で行えているのかどうか判断しづらい状態に結びついていると考えられ、本人が望む作業が練習できる環境を整えることと作業的公正には関係があることが理解された。また、施設内では作業が少なすぎるという認識や施設内イベントやしたい作業の支援の希望は、現在の施設内生活では、自身を成長・維持するには作業が不十分という状態にあると同時に、現在あるイベントが楽しみだけでなく、自身の能力に見合った作業とはどんな作業であるかの検討ができる機会となっている可能性も考えられ、イベントの内容や頻度が入所者の作業的公正と関係があることも理解された。今後は、年齢や性別、日常生活能力などが異なる入所者からの情報を広く収集し理解することで、作業的公正を促進する施設環境への提言につなげたい。

文献：小林 法一、宮前 珠子（2002）. 施設で生活している高齢者の作業と生活満足感の関係. 作業療法, 21 巻 5 号 472-481.

作業科学研究, 10, 94-96, 2016.

The relationship between the facility environment and the occupational justice among female elderly living in geriatric health services facilities who were graded 2 on the care requirement in the insurance of the elderly care

Ikue Sanada, Sawako Saito, Ayaka Ito, Takamasa Mizuno
Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

Introduction: It is known that the occupational injustice state adversely affects human health. Kobayashi (2002) pointed out that elderly living in geriatric health services facilities tend to be occupationally in unfair states. There are few studies describing related to this problems.

Purpose: The purpose of this study was to understand the relationship between the facility environment and the occupational justice among female elderly living in geriatric health services facilities who were graded 2 on

the care requirement in the insurance of the elderly care. Methods: The informants were two women in their late 70s living in geriatric health services facilities who were graded 2 on the care requirement in the insurance of the elderly care. We conducted a semi-structured interview recording it with an IC recorder after obtained consent. The interview data were analyzed by using a qualitative analysis. This research has the approval of the ethics committee of Ibaraki prefectural university.

Results and discussion: Hereinafter, the categories obtained were indicated by << >>. There were two categories founded as the background of their hoping to perform and their performing occupations in the facility: < characteristics of the occupations done in their previous life > and < image of living in the facility >. In < characteristic of the occupation done in in their previous life>, Mrs. Ando caught housework as her duty “Housework was a thing I had to do “. She felt that she had not chosen her occupations by her preference in her life. On the other hand, Mrs. Inomata had performed a lot of occupations which she desired doing it, “Housework was my favorite thing to do” “Doing housework was my hobby” . Both of them had a thought, “The institution was comfortable” “living in facility is to feel relieved” , whereas they felt “There are limitations to do many things here in facility, but it's inevitable” . They also felt “there is few amount of things to do here” while they felt “ the amount of things to do may be appropriate for me” . They may not judge it whether oneself is in their occupational justice state. There was < I cannot return home > in the process of their hoping to perform and their performing occupations in the facility.

Adding to the facility life where they said, “Residents don't have to do anything” , they were also in an environment where “I don't have the opportunity to practice” , or “practicing was banned” . Due to this, they are in a situation where they “don't do the desired occupation, therefore they have little willpower” . The category <Activities to make the life in the facility complete> was connected to <they cannot go back to their home>.

Conclusion: It was understood that occupational justice was connected with fixing the environment of geriatric

health services facilities which can practice occupations that the residents want to do.

家のなかの「平和」を築く作業 ～妻と暮らす脳卒中者のセルフ・コントロール～

藤原瑞穂
神戸学院大学

【はじめに】 日常をみたく作業は、複雑で重層的に絡み合っている。そこには人との関わりがあり、配慮がある。文脈から切りとられた作業から、クライアントの全体性を捉えることはできない。また作業が〈できる〉という認識は行為主体であるクライアントのものであり、医療者側の判断が取って代わるものではない。したがって、クライアントがどのように日常生活を経験しているのかを、立ち上がる事象の内面から描き出すことは、作業療法の重要な課題となっていく。

【目的】 ある脳血管障害を発症した A さんの「家では平和に過ごさなければならない」という語りに注目し、家で「平和に過ごす」という作業がどのように立ち現れ、経験されているのかを探索する。

【研究協力者と方法】 A さんは 70 代後半の男性。4 年前に脳血管障害による右片麻痺を発症し、週1回デイサービスを利用しながら妻と二人で暮らしている。分析は、A さんへの非構造的インタビュー（発症から現在の生活についての語り）によって得られた音声データの逐語録ならびにフィールドノーツから、家で「平和に過ごす」作業について、現象学を手がかりに記述的に探索した1)。なお、本研究は大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学系倫理委員会によって審査をうけ、承認を経て実施した。

【結果と考察】 A さんは「残りの余生」を「平和に過ごす」ために「根本的に変え」ようとしていることがあり、それは、「セルフ・コントロールする一番メンタルなところ」であった。「倒れてから、たとえばぼくは一人で行けるのに家族は介護しなきゃいけないと思っているこの思いの差だとか、前だったらバーンとお母ちゃんにゴーン言われたら、違うと思つたらかみついて反論」していたこと、「お互いに年をとって、今まで折り合っていた価値観がばらばら〜と散り出すこと」に対して、「自分をず〜と少し引いて、少しあがった位置で」「ふわ〜と見ながら行動して、ふわ〜と反省して、生きよう」としていた。

以下、家で「平和に過ごす」ための要素を具体的に A さんの語りから引用する。

妻が恐がることはしない A さんと妻は、回復期リハ病院の退院前訪問で、「ここに手すりつけましょう」「ここはこうやって沈めて」と五右衛門風呂に入るための「手順」を提案される。自宅での生活は「その延長線上」にあった。「持ち方変えたらそれは手順が違う」と指摘することは、妻が作業療法士から受け取った〈役割〉である。A さんが「もうできるんだよ」と言ってもそれは「危ない」ことで、妻の方が「怖がる」。そのような妻をみて「ああこれはもう、これはそういうあれなんだ」として、〈できる〉けど差し控えるという仕方と妻との共作業が生まれていた。

「見えている」が「動かない」 A さんと妻は別の部屋で寝て「棲み分け」している。朝、妻が「ゆったりコーヒー飲んで…ほー」っとしている時間が「見えて」いるが、「こっち向いて布団かぶって。それはもう極端に言ったらコトリとも音をいわせんように、目が覚めとつても」動かない。この気遣いは、A さんの日常に組み込まれていた。

生活のなかの構えと約束事 『『食事』ゆったら『はい！分かりました』、『お風呂』ゆったら『はい！分かりました』』と、妻からの合図を感じる前から、A さんの行為には構えができていた。また、夜 11 時に寝ることは、再発防止のための妻との約束事であったが、A さんにはやりたいことがあり夜更かしをする。すると「怒られてから家内に電灯消されて」「ささいなけんか」になる。A さんは、妻との約束事と自身の願望との間で戦っていた。

妻が管理する環境を変えるときは「絶対ばれんようにする」 毎日の着替えは妻が用意する。A さんは「(シャツのボタンを)はずせんときはあらかじめはめといて手をこう小さくして入らんかな〜とかいう試行錯誤して、…ああこれやったらこのボタンの位置 5 ミリこっちに、ね、縫い直したら入るな思うたら、家内がわからんように、…はさみで切って。ばれたいかんから、ここを一応みて、このところ何回くらいくるくと巻いているかな〜と見て。事前観察して」ボタンを付け替えていた。

A さんの家のなかの「平和」を築くという作業は、A さんのセルフ・コントロールが基盤にあった。それは少し引いて事象を見て、「ふわ〜」と感じて反省して生きることであり、妻との「思いの差」を受け止め、「かみついて」反論しないように、また妻に配慮するという形としてあらわれていた。具体的には、「〈もうできるんだよ〉と思っても〔妻が怖がることは〕一人ではやらない」こと、「〔妻の様子が見えているのに動かない〕こと、〔妻との〕

約束を守る」こと、「妻が管理する環境を変えるときは絶対にばれんようにする」ことであった。

1) 村上靖彦：仙人と妄想デートする 看護の現象学と自由の哲学。人文書院、京都、2016。

作業科学研究, 10, 96-97, 2016.

Occupation of building “peace” in the house: self-control of the CVA survivor living with his wife.

Mizuho Fujiwara
Kobe Gakuin University

Background: Our daily occupations are complex and multifaceted endeavors, and there exist human relationships and concerns. Recognition of “enabling” occupations resides in a realm of a client as an agent of action. Therefore, delineating the client’s experiences from the inside of emerging phenomenon is an important task in the field of occupational therapy.

Purpose: The purpose of this study is to descriptively explore the realities of Mr. A (a CVA survivor) with a help of phenomenological analysis1).

Participant and Method: A research participant is Mr. A in his late 70s, right hemiplegia by CVA for 4 years and now living with his wife. Research methods are participatory observation and narrative interview in a day care center, and obtained field notes and transcript of the interview survey were analyzed. As for ethics of the study, the author has already accepted to the ethics committee in Osaka University.

Results and Discussion: In order to live peacefully in his latter life, what Mr. A is challenging to “radically change” now is “self-controlling mentally” and this became the “basics” in his “rehabilitation” and “family” life. This mentality has been founded “after 1 year and half have passed since his illness suffering.”

Mr. A’s self-control is to live with a feeling of reflectivity. In reality, this has been reflected in the care for his wife to create a family “peace.” More precisely, this has been portrayed in “doing things not by himself,” “not moving alone,” “keeping a promise with his wife,” a so on.

1) Yasuhiko Murakami: Sennin to Mousoude-to Suru, Jimbun Shoin, Kyoto, 2016.

《ポスター発表》

臨床実習における作業療法学生の主観的経験： 最後まで生き残るということ

田中義徳¹⁾，大森謙¹⁾，長田敬和¹⁾，
高見澤広太¹⁾，宮沢輝樹¹⁾，澤田有希¹⁾，
近藤知子²⁾

1) 帝京科学大学，2) 杏林大学

【はじめに】臨床実習は医療職を目指す学生にとって重要な位置を占めるが，大きな不安やストレスの元となる作業である。特に，作業療法では，時期，対象，障害がその都度異なる施設に，1-2人の学生で臨み，その施設の作業療法士である臨床実習指導者に指導を受ける形態を取り，強い緊張感の中実習を行う。臨床実習に関しては，作業療法だけでなく医師・看護・理学療法など様々な領域で研究や報告がなされており，学生の主観的経験の調査もある。しかし，これらはアンケートなどを通してのもので，インタビューを通して学生の経験を深く分析したものはなく，また，学生自身が行ったものも無い。

本研究は，作業療法学生が臨床実習をどのように経験したかを，作業の視点をういながら，主観的側面から理解・整理することを目的とする質的記述的研究である。本研究では，研究者の立場が対象者と同じ学生であることから，学生のもつ本音を明らかにすることができる。得られた結果は，これから臨床実習に行く学生の準備や，臨床実習を終えた学生の自分の経験の整理に役立てることが可能であり，また，教員や実習指導者が効果的な教育・実習指導するために活用できると考える。

【倫理審査】本研究は，本学「人を対象とする研究計画等審査委員会」の承認を得て実施した。

【方法】対象者は，少なくとも2ヶ所の実習地でそれぞれ3週間以上の臨床実習を経験した作業療法学科の4年生3名であった。これらの者に，教室または自宅で60分程度のインタビューを行い，その後必要に応じて追加の質問をした。質問内容は実習で大変だったこと，良かったこと，日常生活の過ごし方などである。得られたデータは，逐語録を作成した後，修正版グラウンデッドセオリーアプローチを基にし，概念化し，カテゴリー化した。

【結果と考察】対象者の臨床実習の経験は①「実習場

面での生き残り」，②「追い詰められた生活の中でのやりくり」，③「実習を通じた変化」の3つのカテゴリーに分類することができた。①の「実習場面での生き残り」では，サブカテゴリーとして「人間関係の構築」，「課題をやり抜く」，「実習場面以外の人からのサポート」が挙げられた。②の「追い詰められた生活の中でのやりくり」のサブカテゴリーは，「睡眠時間の確保」，「日常作業の効率化」，「ストレスの軽減の作業」であった。③の「実習を通じた変化」のサブカテゴリーには「作業療法（作業療法士）への思い明確化」，「技術・知識の進歩」，「自分の問題点の把握」が含まれた。全体的にみると臨床実習とは対象者にとって，普段の大学生活とは全く異なる，「最後まで生き残り」作業であった。

【結論】対象者にとって臨床実習とは，生き残りをかけた作業であった。実習では，臨床場面で良い人間関係を作り，課題をやり抜くだけでなく，生活面でも時間に追われながら日常作業を工夫していた。同時に実習は，作業療法や自分に対する考え方に変化を与える作業であった。

【文献】木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリーアプローチの実践：質的研究への誘い。東京：弘文堂

作業科学研究，10, 98-99, 2016.

Subjective Experiences Occupational Therapy Students during the Fieldwork: Surviving until the End

Yoshinori Tanaka¹⁾，Ken Omori¹⁾，
Keiwa Osada¹⁾，Kota Takamisawa¹⁾，
Teruki Miyazawa¹⁾，Yuki Sawada¹⁾，Tomoko Kondo²⁾

1) Teikyo University of Science, 2) Kyorin University

Background: Field work (FW) is one of the most important and challenging curriculum for the students who aim to be health professions. In our school the occupational therapy (OT) students go at least four different facility individually for 3 to 8 weeks respectively, located in various part of the nation, sometime staying at the residential inn during the field work. It is very stressful for us as the students; we practice in unfamiliar environment, receive supervise from the OTs who are also unfamiliar, and constantly feel to be evaluated. Despite many studies of field works in various health professions, there was no study that

高島理沙¹⁾, 坂上真理²⁾

1) 北海道大学大学院保健科学研究所

2) 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

employed in depth interview and were conducted by OT students. In this study we try to understand OT students' subjective experiences of FW through descriptive qualitative approach. In this study, FW is considered as an occupation. The advantage of this study is that the interviews were conducted by the students who were their classmate of participants. Consequently, participants were able to disclose their honest feelings and thoughts through the interview.

Method: Participants were chosen by convenient sampling. Three 4th year students of our school were selected. They already experienced FW at least at 2 settings for more than 3 weeks. We interviewed each participant approximately 60 minutes at the classroom or their apartments. Additional questions were asked if necessary. The questions included the difficulty they felt, good things that happened, and their daily lives during FW. The interviews were tape recorded and transcribed word for word. Based on M-grounded theory approach (Kinoshita, 2003), the data was read thoroughly, conceptualized and categorized.

Findings and Discussions: As the participants experience, three major categories, 1) surviving at the FW site, 2) managing daily lives in the cornered situation, 3) transforming through FW were raised. Each category had three to four subcategories. The core category was appeared as “Surviving until the end” . The students try to survive during FW in which they had completely different experience from the one they had at their ordinal lives as the university students.

Conclusion: For the participants, FW was experienced as survival. They struggled to construct the relationship with supervisor, staff, and clients, complete assignment, optimize their basic daily activities maximally. At the same time, FW was the place to transform themselves through strengthening the thoughts to be occupational therapists and reflecting their own problems.

Reference

Kojin, K. (2003). Gurandedo Seorii Apurouchi no Jissen: Shituteki Kenkyu heno Sasoi. Kobundo. Tokyo

はじめに：作業科学では作業の形態、機能、意味を研究すると説明されている。本稿では、このうちの作業形態に着目した。作業形態とは、作業の観察可能な側面であり (Clark ら 1998), ある文化の成員によって共有された作業の特定のやり方を表す (Kielhofner 2012)。作業形態を理解するための構成概念として、Nelson(1988) は①物理的環境、②人的環境、③時間的環境を含む物理的側面、および、④文化の構成員と⑤社会文化的意味を含む社会文化的側面に言及している。これらに加えて、Clarkら(1998)は、⑥作業の着想、⑦構成、⑧秩序立て、⑨その他の質的側面を含む質的側面にも言及している。このような作業科学の概念的な知識を実践で効果的に活用するためには、理論と実践を統合するプロセスが必要となる。本研究の目的は、先行研究で言及されていた作業形態の 9 つの下位概念について、作業療法実践のレベルで活用するための具体的な内容を「実践的な定義」として明らかにすることである。

研究方法：作業に焦点を当てた作業療法の実践事例を分析した。(1) 事例収集→日本作業療法士協会の事例報告登録システムを利用し、「意味ある作業」をキーワードに検索した結果、36 例がヒット。このうち、意味ある作業の構築・再構築を支援する内容ではなかった 2 例を除外した 34 例を分析対象とした。(2) 分析方法→作業形態の 9 つの下位概念について事例報告内の具体的な記述を抽出し、マトリックス表を作成。記述されていたそれらの内容を比較検討し、9 つの下位概念の実践的な定義をおこなった。

結果：9 つの下位概念について、作業療法事例の記述に即した実践的な定義が成された。一つのまとまりのある作業として成立するためには、複数の下位概念間の関係性を定めてまとめあげる必要がある。「秩序立て」は、作業形態を構成する複数の下位概念をまとまりのある一つの作業としてまとめあげる“やり方”を示すものであった。その人に特有の作業の“やり方”を理解する上で、特に重要な下位概念であった。作業の秩序立ては、最終的に、「作業の開始から完了に渡って、

人や物を場所や時間の中で順序よく、筋道を通して配置したり処理したりする一連のやり方のこと」と定義された。

考察：作業の一側面として作業形態という概念はこれまでも広く知られてきた。一方で、作業科学の概念的な知識を実践で効果的に活用するためには、理論と実践を統合するプロセスが必要となる。本研究では、先行研究で言及されていた作業形態の9つの下位概念について、事例分析を通じた実践的な定義を試みた。本研究で明らかにされた実践的な定義は、人が作業に結びつくことを支援する際に、その人にとって重要な作業のユニークな“やり方”を理解することを促進すると期待できる。

文 献：Nelson DL. (1988). Occupation: form and performance. *The American Journal of Occupational Therapy*, 42(10): 633-41.

Clark F. & Larson EA. (1998). Developing an academic discipline: the science of occupation. In Schell BAB, Gillen G. & Scaffa ME. (eds), *Willard & Spackman's occupational therapy* (9th ed). Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins.

Kielhofner G. (笹田 哲・訳) (2012). 作業形態 . Kielhofner G. (山田孝・監訳) : 人間作業モデル—理論と応用—改訂第4版, 東京: 協同医書出版社 .

作業科学研究, 10, 99-101, 2016.

Reconsideration of occupational form

Risa Takashima¹⁾, Mari Sakaue²⁾

1)Hokkaido University, 2)Sapporo Medical University

Introduction: Occupational science is the discipline that researches the meaning, function, and form of an occupation. This study focuses on occupational form, which is the visible side of an occupation (Clark et al. 1998), and it is a particular way that members of a particular culture have in common when they perform an occupation (Kielhofner 2012). To understand occupational form, Nelson's (1988) description of the physical side includes 1) physical environment, 2) human environment, and 3) temporal environment, and the sociocultural side includes 4) members of a culture and 5) sociocultural meaning. In addition, the qualitative side,

according to Clark et al. (1998), includes 6) conception of an occupation, 7) construction, 8) organization, and 9) the others. To practically utilize the concepts of occupational science, it is important to integrate theory with practice. The purpose of this study is to explore “practical definitions” of the nine subordinate concepts to employ them in a therapy.

Methods: We analyzed case reports of occupational therapies focusing on occupations. 1) Gathering the case reports: the system offered by the Japanese Association of Occupational Therapy was used. An online search using the keywords “meaningful occupation” resulted in 36 cases. 2) The method of analysis: we extracted descriptions from those reports based on the nine subordinate concepts and made a matrix table. When comparing those descriptions, practical definitions were given to the nine subordinate concepts.

Results: Practical definitions of the nine subordinate concepts were made in line with those case reports. It was necessary to determine the relationships between subordinate concepts and to combine them so that they could become a coherent occupation. “Organization” was particularly an important concept in understanding a person's unique way to perform an occupation. “Organization” was defined as “a series of ways to locate and process persons and objects in a place and time, logically and in order, from start to completion” .

Discussion: Although the concepts of occupational form are widely known as one side of an occupation, implementing the conceptual knowledge of occupational science requires the integration of theory and practice. This study attempted to make practical definitions of the subordinate concepts of occupational form through the analysis of case reports. Those practical definitions could promote the understanding of people's unique ways to perform their important occupations.

References: Nelson DL. (1988). Occupation: form and performance. *The American Journal of Occupational Therapy*, 42(10): 633-41.

Clark F. & Larson EA. (1998). Developing an academic discipline: the science of occupation. In Schell BAB, Gillen G. & Scaffa ME. (eds), *Willard & Spackman's occupational therapy* (9th ed). Philadelphia: Lippincott

Williams & Wilkins.

Kielhofner G. (2012). A model of human occupation: Therapy and application (4th ed). Tokyo: Kyodoishiyakusyuppan.

**Co-occupation としての作業療法における
クライアントと担当作業療法士の相互理解のプロセス**

坂根勇輝^{1,2)}, ボンジェ・ペイター²⁾

- 1) 公益財団法人丹後中央病院,
- 2) 首都大学東京大学院

【はじめに】作業療法はクライアントと作業療法士の‘Co-occupation’ (Pierce, 2003) としてとらえることができる。クライアント-作業療法士関係についてのこれまでの研究は、臨床現場のクライアントと作業療法士のそれぞれの立場から研究を行っており、実際の臨床現場の二人の間でどんな相互作用が起こっているのか十分に解明されていない。実際の臨床現場でクライアントと作業療法士がお互いに『生活ができるようになること』をどのように理解しているのか、その相互理解のプロセスを明確にする必要がある。

【目的】回復期リハビリテーション病棟入院中のクライアントと担当作業療法士が『生活ができるようになること』をお互いがどのように理解しているのかというプロセスを探求し、理解すること。

【方法】Narrative in action (Josephsson 他, 2015) を用いた質的研究で、回復期リハビリテーション病棟入院中のクライアントとその担当作業療法士 1 組を研究対象者とした。データ収集は作業療法場面の観察と非構造的インタビューを行なった。観察は、退院約 2 ヶ月前から 1 ヶ月毎に計 3 回実施した。非構造的インタビューは初回観察前と各観察後にクライアントと作業療法士別々に実施した。質問項目は「先ほどの作業療法の場面について振り返って話してください」等を用意したが、研究対象者の反応に応じて柔軟に実施した。データ分析は、テーマ的ナラティブ分析 (Riessman, 2014) を使用し、研究期間中、複数回実施した観察データからフィールド・ノート、インタビューデータから逐語録を作成し、それを繰り返して読み込み、研究対象者の相互理解のプロセスを説明するために様々な小テーマを用いて 1 つのストーリーを作成した。研究実施については、平成 27 年度首都大学東京荒川キャンパ

ス研究安全倫理委員会の承認を受けている。

【結果と考察】研究対象者のクライアントと作業療法士の相互理解は、「車の事故」「入浴」「プランターの水やり」などの様々なストーリーラインから出来ていた。クライアントは作業療法士に「退院後の生活は未知数で、作業療法はまかせる」としていた。作業療法士はクライアントの心理面を考慮して言葉ではなく、「クライアントを待つ」としていた。作業療法士はただ待つのではなく、受傷前の生活を参考に作業療法を実施して、「入浴」などの ADL 訓練、「プランターの水やり」などの模擬練習、実際に「プランターの水やり」を行うと段階づけて、クライアントを「待たせ」た。クライアントは『生活ができるようになること』について「退院後の生活はイメージできない」から「退院後の生活がうまくできるかどうかかわからない」と変化した。作業療法士はクライアントの『生活ができるようになること』について、当初クライアントもわからず、「作業療法士自身もわからない」状態だったが、経過の中で「家の中で身の回りの事ができたらいい」から「車の運転や仕事もできるのではないか」に変化した。発表では、上記の結果について、作業科学の理論を用いて解釈を行う。

【文献】Josephsson, S., Alsaker, S. (2015). Narrative methodology: A tool to access unfolding and situated meaning in occupation. In S. Nayar & M. Stanley (Eds.), *Qualitative research methodologies for occupational science and therapy*. Routledge, New York. pp.70-83.

Pierce, D.E. (2003). *Occupation by Design: Building Therapeutic Power*. F. A. Davis, Philadelphia.

Riessman, C.K. (大久保功子・訳) (2014). 第 3 章 テーマ分析. (大久保功子・宮坂道夫監訳), *人間科学のためのナラティブ研究法*. クオリティケア, pp.99-145.

作業科学研究, 10, 101-102, 2016.

The process of the mutual understanding between clients and occupational therapists in occupational therapy as co-occupation.

Yuki Sakane^{1,2)}, Peter Bontje²⁾

- 1) Tango Central Hospital, 2) Tokyo Metropolitan University

Introduction: Occupational therapy can be regarded as 'co-occupations' (Pierce, 2003) between clients and occupational therapists. Studies into the mutual

understanding between clients and occupational therapists have typically explored client and occupational therapist experiences separately and do not explain the kind of interactions going on between them. The aim of this study is to explore the process how clients and occupational therapists mutually understand the enablement of clients' daily life in convalescent rehabilitation.

Method: This qualitative research used a narrative-in-action method (Josephsson, Alsaker, 2015). One client and the occupational therapist were separately interviewed preceding and following observation of an occupational therapy session. Three date-gatherings were conducted, one month apart in the last two months until hospital discharge. The interview was unstructured and informed by an interview-guide with open-ended questions. Date-analysis was thematic narrative analysis (Riessman, 2014). One narrative composed of possible plots was then created to explain the process of creating mutual understanding between the client and occupational therapist. The Tokyo Metropolitan University Arakawa campus research safety ethics committee approved this research.

Findings and Discussion: The mutual understanding between client and occupational therapist was created along a variety of storylines, such as "car accident", "bath", "watering the plants". The client entrusted the therapist about the occupational therapy, because he could not imagine life after hospital discharge. The occupational therapist though "waited for the client" to start considering his daily life. Nevertheless, the occupational therapist implemented graded ADL training, such as "bathing", simulated followed by actual IADL training, such as "watering the plants" after consulting about his pre-injury life. The client's thinking about the "enablement of the client's daily life" changed from that he could not image his daily life after hospital discharge to that he could not image his daily life as successful. The occupational therapist thinking about the "enablement of the client's daily life" changed from that the client could do his self-care in his home to that he could drive a car and work. I will discuss the findings by using the theory of occupational

science in the presentation.

References: Josephsson, S., Alsaker, S. (2015). Narrative methodology: A tool to access unfolding and situated meaning in occupation. In: S. Nayar & M. Stanley (Eds.). *Qualitative research methodologies for occupational science and therapy*. Routledge, New York. pp.70-83.

Pierce, D.E. (2003). *Occupation by Design: Building Therapeutic Power*. F. A. Davis, Philadelphia.

Riessman, C.K. (2014). *Narrative Methods for the Human Sciences (First Japanese edition)*. Quality Care, Tokyo, pp.99-145.

障がい者にとって活力ある社会とは

上村麻美 1), 南山七瑚美 1), ボンジェペイター 2)

- 1) 首都大学東京健康福祉学部作業療法学科 OTS
- 2) 首都大学東京健康福祉学部作業療法学科 教員

【はじめに】障がいのある人々の社会的問題を作業の視点から考えることは、活力1) ある社会を実現するために重要である。そこで、彼らの日常に行っている作業（仕事、勉強、日常生活活動、遊び・余暇活動など）の問題とより良く社会参加できるための工夫・問題解決案を検討した。

【対象と方法】T大学の教養教育における基礎ゼミナールでは、我々学生が「障がい者の活力とはなんだろうか」を課題として、少人数（7人のグループ）で、課題に関するインターネットなどから選んだ写真をもとに、フォト・ボイス法2)を用いたグループワーク（4回）とNPO施設を訪問してボランティア活動参加（1回）を行った。グループワークは、PHOTO法ワークシートへ記述し、フィールドでの体験学習の経験を記述した。「活力ある社会」に関する記述に焦点を当て、フレーズを抽出し、同じ意味内容のものに分類・整理した。倫理は、自由参加、身体的または精神的な負荷やプライバシーの保護などを実施した。

【結果と考察】障がいを持つ人の活力ある日常生活を阻害されている3つの『カテゴリー』が抽出された。1つ目は、端に向かって低くなっていたり、タイル調になっていて車椅子に乗る人にとって危険な道路やエレベーターのない駅、入店拒否をするレストランなど、『公共の場での物理的障壁』であった。2つ目は、障がいを持つ人に対して、何かに挑戦する前からできないだろう

と決めつける，自分より弱者であると思った人に徹底的な無視や排除をしようとする，などの『人間関係の中で生まれる精神的障壁』であった。3つ目は，例えば，駅の切符売り場は，車いすのまま購入できるように配慮しているが，実は車椅子からでは文字盤が反射してよく見えず購入が難しい，というような『健常者の一方的判断による改善：善意の障壁』のである。

抽出された3つの障壁を地域的，社会的に取り除くことが活力ある社会に向かう方略であると考え。そのためには，健常者と障がい者が本当の意味での対等な付き合いをして，互いが互いを認め合い，支え合う心の壁を低くするあるいは壊すことが重要になる。また，物理的障壁や善意の障壁を少なくするには，障がい者と関わり，実際にその目線を経験しなければわからない。つまり，健常者と障がい者が共に問題解決に関わることこそが真の解決につながると考える。ここでいう活力とは自由であると考えることができる。つまり，彼らが自由にでかけ，自由に意思決定をし，自分に役割や仕事があるなどの社会参加をするなど，他人から管理されずに自分の人生を自由に作っていくべきであると言える。またその上で自由に挑戦することもできるはずだ。一方で，健常者であれ障がい者であれ，自由な暮らしというのは同時に責任や他人との衝突から生まれる制限があることも考えなければならない。したがって，その越えられる壁をそれぞれ自分（達）で越えていくこともまた，活力ある社会の実現につながるのではないかと考える。

【引用資料】

1) ボンジェ，Asaba, 田村，Josephsson (2010) 作業を再び始めることと「活力」。第14回作業科学セミナー，三原，ポスター演題

2) Amos S, et al (2012). Facilitating a Photovoice Project. Downloaded on April 8 from: http://foodarc.ca/makefoodmatter/wp-content/uploads/sites/3/VOICES_PhotovoiceManual.pdf

作業科学研究，10, 102-104, 2016.

What is a vigorous society for persons with disabilities?

Uemura Asami¹⁾, Minamiyama Nagomi¹⁾, Bontje Peter²⁾

1)OTS, Tokyo Metropolitan University,

2)Prof, PhD, OT, Tokyo Metropolitan University

【Introduction】 In order to realize vigorous societies it is important to consider the occupations of persons with disabilities as a societal problem. We investigated problems of daily occupations (work, study, leisure, etc.) of persons with disabilities and ideas and plans to enhance their social participation.

【Methods】 As part of the basic seminar at TM University we, a group of seven 1st year students, investigated what ‘vigor’ might mean for persons with disabilities. Investigation consisted of a photo-voice approach²⁾ using pictures taken from the internet (4 sessions), a visit to an NPO facility to participate in volunteer work for supporting disabled persons independent living (once). We analyzed the completed photo-voice worksheets and records of the fieldwork experiences by coding and then categorizing and organizing data that were related to ‘vigorous society’. Ethics of voluntary participation, preventing physical or mental harm and protection of privacy were adhered to.

【Results and Discussion】 Three categories emerged that expressed constraints to vigor in disabled persons’ daily lives: physical obstacles and other problems of access to public places, mental barriers emerging between people, and barriers caused by insufficient designing, in spite of good intentions, for disabled persons by able-bodied persons.

Next we considered strategies towards eliminating these barriers for realizing a vigorous society. First, it is important to eliminate or reduce ‘barriers of the heart’ through mutual support and mutual recognition in order to achieve truly meaningful social relationship between able-bodied persons and persons with disabilities. Also, to reduce barriers in the physical environment able-bodied persons should engage with persons with disabilities and experience the world from their viewpoints. Specifically, investigating solutions to problems together might facilitate true solutions.

Consequently, vigor can be considered as a form of freedom, namely disabled persons' social participation is based on them being free to go out, to make decisions, fulfill their roles and work. In turn, they will be free from other persons' managing them and be able to freely shape their own lives. Moreover, they should be able and free to take on challenges. Conversely, like able-bodied persons, persons with disabilities too will have to live with the constraints of considering conflicting interests with other persons and carrying responsibilities. Accordingly, overcoming these barriers requires all individuals' growth in order to realize vigorous societies for disabled persons too.

References

- 1) ボンジェ, Asaba, 田村, Josephsson (2010) 作業を再び始めることと「活力」. 第14回作業科学セミナー, 三原, ポスター演題
- 2) Amos S, et al (2012). Facilitating a Photovoice Project. Downloaded on April 8 from: http://foodarc.ca/makefoodmatter/wp-content/uploads/sites/3/VOICES_PhotovoiceManual.pdf

ものづくりを通じた地域の作業と場所の創造

高木雅之^{1,2)}, 玉利嘉子¹⁾, 室田省二¹⁾,
吉川ひろみ^{1,2)}, 古山千佳子^{1,2)}, ウィックス・アリソン³⁾

- 1) ものづくり工房作ら, 2) 県立広島大学,
- 3) キャンベラ大学

はじめに：地域の資源や作業機会の豊かさが、人々の作業との結びつきと健康状態を左右する (Wilcock 他, 2014)。ものづくりは多くの住民にとって馴染みのある作業であり、人の身体的、精神的、社会的健康を促進するとされている (高木他, 2013)。本発表では、地域におけるものづくりの資源や機会を増やす取り組みとその成果を報告する。

ものづくり教室の概要：住民が集いものづくりを楽しめる場所を地域に創造することを目的に、2012年から旧三原市の4地域においてものづくり教室を開催した。各地域において1～2週間に1回2時間、計5～10回のものづくり教室を実施した。教室には、年齢・性別・障害の有無を問わず誰でも参加できるようにした。参加者は自分の作りたいものを作る、自分の知っていること

を他者に教える、自分たちで道具や材料を準備することを教室の基本とした。

経過：2012年に最初のものづくり教室を県立広島大学にて開催した。教室終了後、10名の参加者とのづくりグループ「作ら(さくら)」を発足させ、ものづくりを継続した。その後、参加者は増え続け、2016年現在では毎回約40名程度が参加している。参加者の50%は60代で、85%は女性である。2014～2015年には、三原市の3カ所のサロンや集会所においてものづくり教室を開催した。3カ所のものづくり教室の合計参加者数は約50名で、60代の参加者が40%、70代が30%で、98%が女性であった。教室終了後にすべての地域でものづくりグループが立ち上げられ、現在も各地域で10～20名の住民が集まって活動を続けている。それぞれのグループによってもものづくりの種類は異なるが、エコクラフト、陶芸、編物、裁縫、革細工、籐細工などが行われている。

成果：【①個人の変化】大学を除く3カ所でのものづくり教室後の質問紙において、80%以上の参加者が楽しみや外出の機会、知人・友人との交流が増え、ものづくりの興味、知識、技能が向上し、生活意欲が高まったと回答した(n=46)。ものづくりグループや参加者個人の作業はものを作るだけでなく、地域のイベントで作品を展示・販売したり、他のものづくり教室で作り方を教えることにも広がった。地域での展示・販売・指導を通して、参加者はやりがいや収入を得ることができ、ものづくりとの結びつきを強くした。【②地域の変化】住民が気軽にものづくりを楽しめる場所が地域に増えた。参加者が地域のイベントにおいて作品の展示・販売を行ったことでサロンや自治会の収入が増え、イベントが活性化した。地元の新聞やテレビでグループの活動が取り上げられ、ものづくりが健康増進や地域づくりに貢献することを住民に知らせる機会となった。

考察：住民がものづくりと結びつくことで、彼らの興味、楽しみ、技能が増し、人間関係や作業は広がった。作業との結びつきを促進する新しい場所も地域にできた。住民が地域の中で意味のある作業に結びつく資源や機会を増やすことで、人々の健康を促進し、作業的に丁度良い地域を創造できると考える。

文献：Wilcock, A. A. & Townsend, E. A. (2014). Occupational justice. In Boyt Schell, B. A., Gillen, G. & Scaffa, M. E. (Eds.), Willard & Spackman's occupational therapy 12th ed. Lippincott Williams & Wilkins,

Philadelphia, pp.541-552.

高木雅之, 吉川ひろみ, 古山千佳子 (2013). 地域住民に対するものづくり講座—ものづくりを通して健康になれる地域を目指して—. 作業科学研究, 7, 19-26.

作業科学研究, 10, 104-105, 2016.

Creating occupations and places through crafts in the community

Masayuki Takagi^{1,2}, Yoshiko Tamari¹, Syoji Murota¹, Hiromi Yoshikawa^{1,2}, Chikako Koyama^{1,2}, Alison Wicks³

1) Mono-Zukuri Kobo Sakura,

2) Prefectural University of Hiroshima,

3) University of Canberra

Introduction: Resources and opportunities for occupation influence occupational engagement in the community and health of people (Wilcock et al, 2014). Crafts is one of the occupations that people are familiar with and promotes physical, mental and social well-being (Takagi et al, 2013). The aim of the presentation is to report the outcomes of our workshop program designed to create resources and opportunities for participating in crafts in the community.

Outline of workshops: The workshops have been held in since 2012. They create a place where residents come together and engage in craft. The workshops were conducted for 2 hours, once a week or twice a month, 5-10 times in each community. All residents could participate in the workshops, regardless of age, gender and disability. The basic principles of the workshops are that participants make things they want to make, teach others what they know and prepare the materials and tools by themselves.

Progress: First workshop was held at the Prefectural University of Hiroshima in 2012. After the workshop the 10 participants formed a craft group "Mono-Zukuri Kobo Sakura". The number of group members has continually increased. As of 2016, about 40 residents participate each time. About 50% of the participants are aged in their 60s and 85% are female. From 2014 to 2015 workshops were held at three community centers in Mihara. The total number of participants in these three community-based

workshops was approximately 50. About 40% of participants were in their 60s and 30% were in their 70s. 98% were female. After the workshops the participants in all three communities formed their own craft group and have continued making things. Participants engage in a range of crafts such as weaving paper bands, pottery, sewing, knitting, and leatherwork.

Outcome: 【①Changes within individuals】 In the questionnaire sent to participants in the three community-based workshops, more than 80% of participants (n=46) responded that their opportunities for taking pleasure, going out and meeting friends had increased; their interest, knowledge and skills related to crafts were improved; and their will to live was enhanced. Participants are now making things to sell, are displaying their products at community events, and are teaching craft skills at other community workshops. 【②Changes within communities】 Places where residents can easily engage in craft were created in the communities. The residents' associations have benefitted from the funds raised and the sale and display of products have enlivened community events. The local newspaper and television have run stories on the group activities. These stories have made other residents aware that engagement in craft can contribute to health promotion and community development.

Conclusion: When residents engaged in community-based craft groups, their interests, pleasure, socialization, range of occupations and skills increased. Also new places to promote occupational engagement were created within communities. Providing resources and opportunities for residents to engage in meaningful occupations in the community may promote healthy people and occupationally just communities.

プレイバックシアターが大学生の自尊感情と自己効力感に与える効果の検討

黒瀬亮太¹⁾, 津田絵美子¹⁾, 吉川ひろみ²⁾

- 1) 県立広島大学保健福祉学部作業療法学科学生,
- 2) 県立広島大学保健福祉学部教授

はじめに：コミュニケーションスキルの基盤には、適度な自尊感情と自己効力感が必要とされている。プレイバックシアター（以下、PBT）とは、参加者が自分の体験したできごとを語り、それをその場ですぐに即興劇として演じる独創的な即興演劇である。PBTでは“doing”に焦点を当てる。これは、作業の理解を助けると考えられる。

目的：本研究は、PBTワークショップ参加が大学生の自己効力感、自尊感情、個人課題への遂行度、満足度に与える影響を検討することを目的に行った。

方法：「人前が出るのが苦手な人」を口頭説明と質問紙で募り、集まった15名の大学生を対象に1～3日間のPBTワークショップを開催した。演習では、ゲームや歌、リテルを経験し、ストーリーでは全参加者がテラー、アクター、観客を最低1回は務めるように構成した。PBTの前後に質問紙にて特性的自己効力感尺度(GSES)、ローゼンバーグ自尊感情尺度(RSES)、個人課題への遂行度と満足度を調査した。倫理的配慮として、参加者に書面および口頭でインフォームドコンセントを実施した。

研究方法：単一コホート前後研究。GSES、RSES、個人課題の遂行スコア、満足スコアの平均をPBT参加前後で比較した。

結果と考察：全ての指標で介入後に平均値が向上した。平均値はGSES介入前61.3、介入後81.0、RSES介入前23.6、介入後29.2、個人課題遂行スコア介入前3.38、介入後5.58、満足スコア介入前2.79、介入後6.12(全て $p < 0.05$)であった。以上の結果よりPBTワークショップは大学生の自尊感情と自己効力感を向上させることがわかった。参加日数や務めた役割によって自尊感情と自己効力感に与える効果に有意差は確認されなかった。PBT後の自由記述に「難しかったけど楽しかった」、「思い切って挑戦してよかった」というコメントがあった。それより、困難を克服する経験が自己効力感、自尊感情を向上させたと考えられた。また、「どんな事でも他人に受け入れてもらえる」「雰囲気が良く、

行動や勇気が出る」という記載から、コミュニティが形成されたことが考えられた。

結論：大学生にとってPBTワークショップに参加することは、実際にコミュニケーションスキルの重要な要素である自己効力感と自尊感情を実際に他者と関わりながら向上させることができる、実践的な手段の一つであることが示唆された。

文献：

Rowe. N: The Drama of Doing: Occupation and the Here-and-Now. *Journal of Occupational Science*, Vol 4, No 2, pp 75-79, 2004

Salas. R: Playback Theatre as a tool to enhance communication in medical education. *Medical education online*, Vol 18, 22622, 2013

作業科学研究, 10, 106-107, 2016.

Examination of the effect of playback theaters on self esteem and self efficacy of university students.

Kurose R¹⁾, Tsuda E¹⁾, Yoshikawa H²⁾

- 1) Prefectural University of Hiroshima, Faculty of Health and Welfare, Department of Occupational Therapy, Student.
- 2) Prefectural University of Hiroshima, Faculty of Health and Welfare, Department of Occupational Therapy, Professor.

Introduction: The foundation of appropriate communication skills are based on self esteem and self efficacy. Playback Theater (PBT) is a creative and improvisational form of theatre which a group of actors "play back" real life stories told by participants. Focusing on "Doing" in PBT helps understanding of occupation.

Purpose: This study examines the PBT workshop's effect on self esteem, self efficacy, satisfaction, and degree of personal problems resolution of university students.

Methods: Fifteen university students who reported their problems of social interaction participated in this survey. They attended the PBT workshop for 1 to 3 days. In the workshop, they played games, sang songs, and played the roles of Teller, Actor, and Audience in the stories of PBT. They answered a questionnaire before and after the workshop about the Generalized Self Efficacy Scale (GSES), Rosenberg Self Esteem Scale (RSES), and

performance of resolving personal problems and satisfaction of it (Personal Goals). The average scores of the GSES, RSES, and Personal Goals were compared before and after the PBT. Participants provided written informed consent after explanation about this study.

Results and discussion: The mean of all scores improved after intervention. The average scores for GSES were 61.3 and 81.0 respectively the investigation. The scores for RSES were 23.6 and 29.2, the performance scores were 3.38 and 5.58, and the satisfaction scores were 2.79 and 6.12 ($p < 0.05$). The results showed the PBT workshop can enhance the communication skills of university students. Comments from participants were: "It was fun, though it was difficult", "It was a big challenge for me". The results of this survey proved that overcoming difficulties can improve their own self esteem and efficacy. The reason for forming the community was suspected by their comments: "I felt other members could accept anything from me", "The atmosphere was good, so it was easy to express my feeling".

Conclusions: The PBT workshop is a practical way of enhancing university students' self esteem and self efficacy which are the elements of communication skills.

References:

Rowe. N: The Drama of Doing: Occupation and the Here-and-Now. Journal of Occupational Science, Vol 4, No 2, pp 75-79, 2004

Salas. R: Playback Theatre as a tool to enhance communication in medical education. Medical education online, Vol 18, 22622, 2013

南カリフォルニア大学での4週間で私に与えてくれたもの

新谷眸
所属なし

【はじめに】いまから約2年前の2014年の夏、アメリカ南カリフォルニア大学にて4週間の作業科学サマープログラムに参加した。その経験が今の自分にどのような意味を持つのか、改めて振り返ってみたいと思う。このプログラムは、南カリフォルニア大学の大学院進学を目指す人への導入、アメリカの作業療法及び作業科学に

ついでに紹介、英語を磨き発信する力をつけること、そして他国の作業療法士との交流を持つことを目的としている。私は直感的に行ってみたいと感じ、応募した。第1回目の今回、メキシコ、ベネズエラ、コロンビア、ノルウェー、韓国、台湾、日本から計7カ国11名の作業療法士、作業療法学生、臨床心理士が集まり、彼らとは大学内の学生寮で寝食を共にした。1週間のスケジュールとして、月曜から木曜までの午前中は、各分野のエキスパートによる講義を受ける。午後はプレゼンテーションについての講義と実践、またはひとつの文献を元に意見を交え、理解を深めるワークショップ、それ以外にも Site visit と称した実際の病院や施設が見学できる機会が設けられた。そして毎週金曜日はアクティビティの日として、BBQ をしたり美術館を訪れたりした。また共同生活の中では、課題を一緒に取り組んだり、夕食にそれぞれの国の料理を作るなどして交流を深めていった。

【出来ない自分との対面】英語に関しては、日常会話に不安はなかった。しかし授業となると、全くと言っていいほどついていけなかった。やっとの思いで1日目が終わりに、頭を抱えていたのも束の間、明日までに読む論文を宿題として渡された。想像以上の自分の出来なさに、場違いな所に来てしまったと感じた。逃げたい気持ちでいっぱいになり、この4週間のプログラムを担当する Danny 先生に宿題が出来ないと相談すると、論文の中の重要なポイントに印をつけ、「まずはここだけ読んでみて」と論文の読み方を教えてくださった。授業が終われば毎回必ず、Do you have any question? と聞いてくださった。出来ない自分のことを認めて、手を差し伸べてくれる人がいることが嬉しかった。クラスメイトも共に学び、支えてくれていた。異国の者同士の生活は、はっきりと口にしなければ分かり合えない部分も多いが、同じ作業を共有する中で見えてきたこともあった。なんでもできるように見えた彼女も、様々な思いを抱え懸命に課題に取り組んでいた。私が心が折れそうな時、そっとメモを渡してくれた。自分はひとりで課題と向き合っているつもりでいたが、ひとりではない気がついたとき、元気がでた。

【恵まれた環境で学べたことへの感謝】出来ないことの方が圧倒的に多い毎日であったが、気持ちが折れることなく4週間取り組むことができた。元々、自分の勉強の出来なさにコンプレックスがあったが、小さな達成感と自信が少しずつ積み重なっていくのを感じた。それは

何より恵まれた環境のおかげであったと感じる。たくさんの出来なかったことより、少しの出来たことに焦点を当てることが出来た。共に時間を過ごし、日々の振り返りを共有してくれる人がいたことは、自分の進んでいる方向への安心感、一歩先を見たいと思える推進力を与えてくれた。そして、その思いは日本に帰国してから日本作業科学研究会に入会し、勉強会を通して魅力的な先生方に出会うきっかけへとつながりを持つことができた。

【この経験が与えてくれたもの】自身を取り囲む場所や人やものやタイミングなど、人が環境から受ける影響力はとても大きいのだと感じた。そういったことは作業療法の中で学んで理解していたつもりであった。しかし今回の経験を通して、改めて気づいたというよりも、今までの自分の想像を超えた新しい発見であった。自分が心に響く経験をしたとき、いつも素敵だと感じる人の存在があった。作業療法が素敵だと感じていた思いは、作業療法をしている人が素敵だということでもあるのだと感じた。この経験は、作業療法士という仕事と私自身との関係をより強く繋げてくれた。

作業科学研究, 10, 107-108, 2016.

What I got in Summer Occupational Therapy Immersion

Hitomi Shintani

【Introduction】 In 2014, I had joined the Summer Occupational Therapy Immersion (SOTI) program at the University of Southern California (USC). I am going to explain what I got from these. This program designed for international occupational therapists who are interested in studying in the United States. It will serve as an introduction to occupational science and occupational therapy in the United States. And you will also have a network with other international occupational therapy professionals. I immediately decided to join. From Mexico, Venezuela, Colombia, Norway, South Korea, Taiwan and Japan total seven countries eleven people gathered at USC. We had stayed together in the USC's apartments. As a One-week schedule, From Monday to Thursday, we had lectures from USC's renowned faculty of each field. From afternoon, we were provided a

lecture and practice of the presentation skills, workshops for deep understanding. Also, there were opportunities to be able to tour at an actual hospital, which is called Site visit. And every Friday, we had a variety of fun activities. The classmate and I did homework together and cooked together in the share apartments.

【Break through my weakness】 Except daily conversation, I could not understand any lectures. On the first day, we got an article have to read until tomorrow. There were too many things which I am not be able to. I felt down. I thought I am not the right person who is being here. I asked Dr, Danny who is managed this program. He marked the part of article and said, "Don't worries, Hitomi. Let's start to read important part." Everyday, the faculty asked me, "Do you have any question?" after each lecture. I felt they are happy to support us. All of classmate also helped each other. Sometimes, It is difficult to understand without conversation if they come from different countries. However, I saw clear that a classmate also try her best even struggle in hard environment. When I felt giving up, she gave me lovely message. I realized that I was always helped by many people. It made me stronger.

【How effective environment is】 I knew I have had many things not be able to do. Nevertheless, I was able to do my best. I felt that I built the confidence little by little. It is because of an environment I got. Those who spent time together show me the way where I go. They led me forward. I registered Japanese society for study of occupation when I came back. It gave me wider community with wonderful occupational therapists.

【What I got in there】 I thought how big environment effect people. I had known how it is through the occupational therapy. However, I found the real into my experiences. There were always wonderful people, when I had wonderful experiences. Not only occupational therapy is nice, but also those who have occupational therapy. Occupational therapist means me a lot.

作業ストーリーを通じクライアントが主体的に作業に取り組めた事例

富高史裕¹⁾, 安部美和²⁾

- 1) 半田市立半田病院
- 2) あいち福祉医療専門学校

【はじめに】人工股関節置換術（以下 THA）後の事例は、自宅に帰るために杖が必要であると思い込んでいた。しかし、杖を使わずに生活をしたい自己の作業への迷いが生じていた。本事例では、作業に対するエンパワメントが行えず、退院後の自宅での生活がイメージ出来ていなかったと考えられた。今回、退院のイメージを構築する際に Clark らが提唱する「ストーリーテリング・メイキング」という作業科学の知識を用い、事例が退院後の生活イメージを再構築できたので報告する。尚、報告は書面を用いて同意を得た。

【事例】入院初日～4 病日（困惑期）：事例は 70 代前半女性で、夫は数年前に他界し一人暮らししていた。入院当初より作業について質問すると「杖持った生活では、一人暮らしはできない！」という発言が聞かれていた。作業をすることに不安を抱いている姿が見られた。退院後の作業についてイメージができなかった。このため作業療法士（以下 OTR）は、ストーリーテリングを心がけ事例の言葉に耳を傾けたところ、事例が夫と過ごした思い出の詰まった場所で花を作り、隣人との交流・息子夫婦・孫と過ごす時間を楽しみながら一人暮らしを継続したいとの思いが聞かれた。しかし、痛みが出てからは屋内での家事に時間をかけて行うようになり、庭で花を作ること・散歩に出ることが出来なくなると語った。また、下肢の痛みから杖を手放すことが出来ず、杖について何かを行う今までの作業遂行の形を変更する事は出来ないとの思いが強くなってきた。5 病日～13 病日（模索期）：カナダ作業遂行測定を通し、事例は家事・料理を行い、息子夫婦・孫と一緒に楽しい食卓・応援を行いたいと述べた。そのために日常生活活動の拡大について問題を話し合い、杖の必要性について一緒に考え、事例は歩くときに右足に痛みが出るから左足で庇わないといけないと語った。そこで作業コーチとして、右足へ体重を乗せた時にどんな気持ちがあるのか聞き一緒に考えていく事にした。「杖があれば右足に体重かけても大丈夫」と肯定的な発言し、OTR は術前より上手く歩けることを賞賛した。14 病日

～17 病日（創造期）：作業コーチにより気づきと、行動を続けてきたことで、事例から「病棟でも杖なしで歩いてみるわ」と発言が聞かれるようになった。OTR は、さらに日常生活活動の拡大をしていくために、家事の練習を取り入れた。家事を入れていく事でより退院後の生活イメージを再構築することが出来るようになった。そのことで、「杖があるなしに関らず私のやりたいことができた。私らしく新しい作業に取り掛かれることができるようになった」という発言が聞かれ、事例の作業が杖の有無に関らず行える様に変容があった。

【考察】Clark¹⁾ らは共同作業とは、概して、平等な立場で共に働くという意味だと考えられる。共同作業は、セラピストが会話やその過程をコントロールする力を放棄し、生存者が完全に同等の立場をとるときに生じていると述べた。ストーリーテリング・メイキングという知識を用いたことで、OTR は事例の言葉に傾聴する機会が増え、OTR 主導から事例の支援者として関った。事例は、自己決定し作業の意味を再確認することが出来、古い自分を新しい作業的存在である自分に再生することができたと考えられた。今後も作業科学の知見を深め、クライアントの作業遂行を支援出来るよう取り組みたい。

文献：Clark, F. Zemke, R. 編者；佐藤剛監訳（1999）. 作業科学—作業的存在としての人間の研究. 三輪書店, pp407-430

作業科学研究, 10, 109-110, 2016.

Cases where client through the work story was tackled to proactively work

Fumihito Tomitaka¹⁾, Miwa Abe²⁾

- 1) Handa City Hospital
- 2) Aichi College of Well-being and Rehabilitation

[Introduction] Total Hip Arthroplasty after client, cane in order to return home was not convinced that there is need. They lost to the self of the work you want to live without the cane has occurred. In the client, can't be performed empowerment is for the work, life at home after hospital discharge is believed to have not been able to image. Clark. Advocated at the time to build a hospital in the image "Occupational Storytelling, Story Making" using the knowledge of the OS we report a case can rebuild the living image of the post-discharge.

[Case] 1 to 4 disease Date (puzzle): The client is a 70s woman,

It was the question at the time of work start "In a life that has a cane, I can't live alone!" remark has been heard. I had been concerned about the work, I could not image for work after hospital discharge. OTR, was listening to the words of the case try to storytelling, client to make a flower in places where cases are full of memories spent with her husband, Client is to make a flower in a place of memories of living with her husband, want to live alone I look forward to spending time with my son a couple-grandson. Do only housework in pain, I do not go to the flower beds, walk. In addition, it is not possible to let go of the stick from the pain of the lower extremities, think that it can't be changed for going to the occupational performance with a cane was strong. 5 to 13 day (groping) : Through the COPM, Do the housework and cooking, he said want a fun table with son couple and grandson. Discuss the issue for expansion of the ADL for that, thinking together about the need of a cane, it said the necessary follow-up because the right foot hurts when you walk. As a occupational coach, thought to how questions happens when put weight to the right foot. Positive remarks as "be over body weight the right foot if there is a cane all right", and praised that OTR is that walk well. 14 to 17 day (creative) : There was a remark as "I try to walk without a cane" by have been aware behavior by the occupational coach. OTR is, because of the expansion of the ADL, incorporating the practice of housework. It has become to be able to rebuild a life after hospital discharge in making the housework. By that, I am saying that "no matter without there is a cane was able to do what you want of me" is heard, occupation regardless of the presence or absence of the cane was done.

[Discussion] Clark¹⁾ is a joint work, in general, it is considered that it is the sense of working together in equal footing. Collaboration, to give up power to the therapist to control the conversation and the process, survivors said that occur when taking a completely equal footing. By using the knowledge storytelling making, OTR has increased the opportunity to listen, accustomed as supporters from the initiative. Client, check the meaning of the work from self-determination, was believed to have found a new work existence.

Literature : Clark, F. Zemke, R. Editor; Tsuyoshi Sato translation supervisor (1999). Work science - human research as a work existence. Miwa bookstore, pp407-430

院内クリスマスコンサートにまつわる作業の意味 ：作業的公正の可能化に向けた病院での実践

大下琢也^{1,2)}, 田中美穂¹⁾, 大出春香¹⁾,
篠塚仁蘭¹⁾, 山根伸吾³⁾

1) 西広島リハビリテーション病院,

2) 広島大学医歯薬保健学研究科博士課程前期,

3) 広島大学大学院医歯薬保健学研究院

【はじめに】入院患者は、入院環境に伴う様々な制約に「病院だから当たり前、仕方がない」という意識を持っており(畑中ら, 2003), 基本的に決められた生活の中で作業の選択の機会に乏しいといえる. 今回, 当院の作業科学勉強会で, 回復期リハビリテーション病棟における入院患者にとっての「作業的に丁度良い社会」について検討した. その一環として, 入院患者を巻き込みながらクリスマスコンサートを企画し参加を促した. 本研究の目的は, コンサートの準備から役割を持って参加した入院患者 2 名の経験を作業の意味の観点から明らかにすること, 作業的公正の枠組みから今回のコンサート企画の意義について検討することである.

【方法】回復期リハビリテーション病棟入院中に, 役割を持ってコンサート企画に参加した 2 名(A 氏, B 氏)を対象とした事例研究である. コンサートにおける役割は, 事前に聴取した各々にとって意味のある作業と関連が深いものとし, A 氏は「写真撮影」と「パソコンでの文書作成」の作業から当日の写真撮影と案内状・掲示物作成, B 氏は「書道」の作業からステージ看板制作に携わった. コンサートより 6 カ月後に, コンサートを時系列に振り返る形で半構造化面接を実施し, 面接時間は各々約 30 分間であった. インタビューは録音して逐語録を作成し, 意味のあるまとまりでコード化を行なった. コードを分類するためのカテゴリとして, 作業の意味を考えるための枠組み(吉川, 2009)を参考にし, 分類した意味の解釈の妥当性については対象者に確認した. なお, 本研究は当院倫理委員会で承認され, 対象者から書面で同意を得ている.

【結果】インタビューにより, 2 名ともコンサートにまつわる作業を「プラス作業」として捉えていたが, その意味はポジティブなものばかりでなく, ネガティブなものも含まれていることが明らかになった. A 氏は写真撮影について「果たして私に上手い具合に務まるのだろうか」という当初の不安について語り, 「回数を重ねさせてもらっ

てどうにか撮れるようになった」ことで、作業の分類としては、仕事・義務であったものが遊びの要素を含むものに変化したことが伺えた。写真撮影とパソコンでの文書作成に関して、退院後も意味はそのままに作業を継続できていた。B氏は書道について、「字がね、これよりももう少し本当は綺麗に書くことができるんでしょうけど、現状はね、努力の経過を見ていただくのが一番かな」「また一年後に更にもうちょっとね、少しでも良くなれば、自分としても良かったかなと思うんでね」と人や時間のつながりについて語り、自身との関わり・アイデンティティとしては自己表現に該当すると考えられた。また、「大きな字を書くこと自体はなかなかできないですからね」「そういう意味で、本当にいい経験をさせてもらった」と、今回の入院生活において作業選択の機会があったことについて語った。

【考察】今回のコンサート企画により、入院生活という特殊な環境の中においても、対象者2名の作業を自然な文脈で取り入れられたことで、結果的にこれらが「プラス作業」としてのポジティブな意味を多く含んでいたと考えられる。作業的に丁度良いといえるためには、病院においても「人をリスクから守る必要性と、人が丁度よいチャレンジをすることのバランスをとっていく必要がある」(タウンゼント, 2011)と、選択とリスクの重要性が指摘されている。A氏の不安を乗り越える過程はリスクに向き合って役割の責任を負ったチャレンジであり、B氏の看板作りは自己表現としての本来の作業を経験できる貴重な選択肢の1つであったと考えられる。今回の企画は、作業的公正の枠組みにおける構造的要因に対して、病院での実践としてはたらきかけるものであった。これにより対象者が意味のある作業に結びつくことを可能にし、作業的公正を導くものであったと考えられる。入院患者・病院全体としての作業的公正につながったかは今後更なる検討が必要だと考える。

【文献】畑中祐子, 杉田聡: 入院環境における準拠枠の変化—「仕方がない」という諦めの気持ちの考察を通じて—。保健医療社会学論集 14(1): 49-58, 2003

吉川ひろみ: 作業の意味を考えるための枠組みの開発。作業科学研究 3: 20-28, 2009

エリザベス・タウンゼント, 吉川ひろみ: 作業的公正の可能性—病院での実践。作業療法 30: 671-681, 2011

作業科学研究, 10, 110-112, 2016.

Meaning of the occupational experiences through the Christmas concert : Enabling occupational justice in hospital practices

Takuya Ojimo^{1,2)}, Miho Tanaka¹⁾, Haruka Ode¹⁾,
Kimika Shinozuka¹⁾, Shingo Yamane²⁾

1)Nishi-Hiroshima Rehabilitation Hospital,

2)Hiroshima University

Introduction: Inpatients have to obey many rules during hospitalization even if they have a feeling of opposition. They are separated from their daily lives, and there is a lack of occupation choice for decision making. At the internal study group on occupational science, our group discussed creating an occupationally just society in a convalescent rehabilitation ward. As part of our action plans, we organized a Christmas concert involving patients.

The purpose of this case study was to describe the meaning of the occupational experiences of two patients who had specific roles in the concert, and to confirm the significance of the event through a framework of occupational justice.

Method: Two patients (A, B) participated in this study during their hospitalization. They had some roles in the concert. These roles were intimately related to each patient's meaningful occupation identified by interviews conducted beforehand.

Case A: He performed the roles of "photography during the event" and "creating a poster and invitation cards using a computer" which is related to his occupation: photography and word processing.

Case B: He performed the role of "producing a signboard to decorate the stage" which is related to his occupation: calligraphy.

We conducted semi-structured one-on-one interviews, which took 30-minutes, with each of them about the concert just six months after the event. With their consent, the interview was recorded and verbatim transcription was made. The data was separated and coded based on the meaning, and categorized by using a "frame of meaning of occupations" (Yoshikawa, 2009). This study was approved by our hospitals' ethics review board.

Result: The interviews revealed that their occupational experiences through the Christmas concert was identified as positive occupation in and of itself by both patients. However,

the experiences contained both positive and negative items of a “frame of meaning of occupations.” Participant A referred to his initial anxiety and mentioned, “Would I be able to fulfill the role?” It can be seen from his comment, “Through repeated shooting, I managed to meet a basic level of quality of photography”, that his activity categories changed from work to play. He continues to engage in photography and word processing after being discharged. Regarding calligraphy, B said, “Although it could be done more nicely, I want others to feel my effort” and “If it would improve after one year, I would find a sense of contentment.” His comments indicated that there are meanings of connection to others and time, and relation to his identity and self-expression through the experience.

Discussion: Townsend (2011) indicates that it is important for the occupationally just society to facilitate individual, group or community choice, involvement in just- right risk-taking. It could be said that A’s process of overcoming his initial anxiety corresponded to a challenge despite risks. B’s producing a signboard led to his occupation choice and meaningful occupation that was related to his self-expression. In sum, this event contributed to our practices in the hospital, in terms of structural factors of the framework of occupational justice.

作業中心の実践が有益だった急性期脳出血を有する個人クライアント

池内克馬¹⁾, 西田征治²⁾, 竹内一裕¹⁾
1) 岡山医療センター, 2) 県立広島大学

【はじめに】急性期脳血管障害者に対して作業を用いた実践に関する文献をレビューした結果, 作業を用いた実践よりも不動・廃用症候群を予防するための介入が優先的に行われていた。軽度な左視床出血を有する個人クライアント(以下, CL)に対して, 筆者は作業療法開始日から作業療法介入プロセスモデルに基づいた作業中心の実践を展開し, 有益な効果が得られたので報告する。なお, CL に対して本報告趣旨を口頭と書面で説明した後に同意を得ており, かつ当院倫理委員会の承認を得ている。

【CL 中心の遂行文脈】CL は妻と二人暮らしをしていた70 歳代の男性で, 成人期には水道工事に従事してい

た。左視床出血のために入院し, 翌日から作業療法が開始された。頸椎疾患に由来する右肩と肘に筋力低下があり, 発症 3 か月前に手術を受けた。頸椎の手術後から活動性が低下し, 役割を有していなかった。現在は, 右上肢, 両下肢の筋力が更に低下したと感じ, 安定した歩行の獲得を望んでいる。妻から介助を受ければ入院前の生活に復帰できると考えている。

【評価】カナダ作業遂行測定(以下, COPM)の結果は, 「風呂の掃除をする」, 「庭木の剪定をする」などであった(遂行スコア 3.2, 満足スコア 2.4)。運動とプロセス技能の評価(以下, AMPS)では, 安全に遂行できないため継続的な介助を要し, 運動ロジットは 0.4, プロセスロジットは 0.4 であった。

【原因の解釈と目標設定】頸椎の手術を受けた後に活動性が低下したこと, 遂行する作業の難易度が高いことが主たる原因だと捉えた。また, CL が報告した作業を安全に遂行できないと推測されたため, 目標を「活動性が向上するための回復作業を退院後に自宅で遂行する」に再定義した。

【介入モデルの選択と介入】回復モデルを選択し, ①病棟の散歩, ②洗面台の掃除という回復作業を事例と協業しながら行った。①では, 自宅と病棟で散歩するための練習を実施した。散歩に関するリッカートスケール(1: 自宅で全くできないと思う~ 10: 自宅でとてもうまくできると思う)は 1 点であった。CL と妻に対して自宅で散歩する方法について退院前に教示した。②では, CL が椅子を準備するなど, AMPS における 1 点の技能項目に着目して作業と環境を調整した。CL は「足が良くなっている」という感想を述べた。妻が行うため, CL が退院後に洗面台の掃除を行うことはなかった。

【結果】COPM の遂行スコアは 3.0, 満足度は 2.0 であり, AMPS の運動ロジットは 0.4, プロセスロジットは 0.7 であった。プロセスロジットは統計学的に有意ではないが臨床的意味のある改善が得られた。リッカートスケールは 7 点に改善し, 協業的に取り組んだ散歩が可能となった。8 回の作業療法を行い, 介入から 14 日目に自宅へ退院した。

【考察】Bigelius らは, 入院前の PADL が自立し, 認知機能障害がない入院 2 ~ 60 日目の脳血管障害者を対象に AMPS を実施したところ, 実施した作業に対して CL 自身が意味と価値を認めたと報告している。軽度な脳血管障害者を対象とした本研究においても, CL と協業した「散歩」に関するリッカートスケールと

AMPS のプロセスロジットが改善し、退院も可能になった。つまり、CL にとって有益な効果が得られた。以上より、脳血管障害由来の症状が軽度な CL に対しては、発症直後から作業中心の実践を行うことが有益だと考えられる。ただし、対象が 1 事例であるため、本報告の結果を一般化することができない。特に、重度な急性期脳血管障害者に対する作業中心の実践の効果は不明確である。対象者数を増やした検討や、重度な脳血管障害者に対する作業中心の実践の蓄積を希求する。

【文献】 Bigelius, U., Eklund, M. & Erlandsson, L.K. (2010). The value and meaning of an instrumental occupation performed in a clinical setting. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 17, 4-9.

作業科学研究, 10, 112-113, 2016.

An effective practice for a client with acute thalamic hemorrhage

Katsuma Ikeuchi¹⁾, Seiji Nishida²⁾, Kazuhiro Takeuchi¹⁾

1)Okayama medical center

2)Prefectural University of Hiroshima

Introduction: We reviewed literatures about practices on occupations for clients with acute stroke. As a result, occupational therapists' priorities for the clients were to prevent disuse syndrome. The purpose of this paper was to report an effective occupation-centred occupational therapy for a client with acute thalamic hemorrhage.

Client-centred performance and context: A client was septuagenarian and had a wife. He was admitted to the hospital because of left thalamus hemorrhage. He could not flex the right shoulder and elbow because he had undergone a surgery on his cervical spine in the 3 months before the admission. He has not had anything to do and roles since he underwent the surgery.

Evaluation: In the Canadian Occupational Performance Measure (COPM), he reported cleaning the bathroom, pruning plants and so on as occupations he wants to. The performance score was 3.2, the satisfaction score was 2.4. In the Assessment of Motor and Process Skills (AMPS), the motor logit and the process logit were 0.4 and 0.4 respectively.

Clarify the reason for client' s problem of occupational performance and redefine a goal: The reason might be that he got to be inactive after the surgery, and his occupations were so difficult that he could not perform. We set his goals he could perform restorative occupations to develop his body functions at his house.

A model and implementation: We selected a model for enhancement of body functions. Then, we performed two occupations: (a) taking a walk and (b) scrubbing a sink. In the (a), he practiced taking a walk the ward in the hospital. His 10-value likert scale: one means he could not do at all, 10 means he could well for taking a walk was one. In the (b), we applied the occupation and environment to his abilities. As a result, he told me that he felt like enhancing the muscular strength. I collaborated with him throughout the process of occupational therapy.

Results: In the COPM, the performance score was 3.0, the satisfaction score was 2.0. In the AMPS, motor logit was 0.4 and process logit was 0.7. This development represented a clinical improvement. The likert scale was 7 and he got to be able to take a walk after discharge.

Discussion: Bigelius et al. investigated that patients with acute stroke perceived the value and meaning attached to an occupation. Participants had been independent of personal ADL before the onset of stroke, and not being diagnosed with dementia or other pre-morbid cognitive dysfunction. This study also targeted at the client with mild stroke, and the process logit in the AMPS and the likert scale were advanced. Therefore, this evaluation and intervention were effective in him. In other words, it is beneficial for clients with mild acute stroke that occupational therapists provide occupation-centred practices. However, our insistence cannot be generalized because this approach was practiced only one case. Specifically, it is not unclear whether occupation-centred practices are effective in persons with moderate or severe stroke. It is necessary that we develop occupation-centred practice to many of the samples especially moderate or severe stroke.

ゴミ袋の名前書きにより作業的ウェルビーイングの経験を促せた事例～認知症を呈したクライアントとの関わりを通して～

有賀康大，倉田勲
上伊那生協病院

【はじめに】Townsend¹⁾は、「クライアントが作業的ウェルビーイングを経験した時、健康が深まると考える。」と述べている。本事例において、作業療法士（以下OT）とクライアント（以下CL）の妻との偶発的な情報提供から作業が展開したことで、作業の価値を見出す語りが聞かれ作業的ウェルビーイングの経験を促せた。また役割作業の意味や形態についても捉えるきっかけとなった為、その経過を報告する。本報告による作業的ウェルビーイングの定義は「人が自分の作業的生活で行う中でそのやり方から満足感や意味を感じるという経験¹⁾とする。尚、発表に際し倫理的配慮に基づき書面にて同意を得ている。

【事例紹介】80代・男性。若年時は会社の事務，結婚後は農業を行っていた。性格は物静かで無口であった。妻と2人暮らしで、他県に娘が在住し月に数回帰省していた。最近では屋内での生活が主であったが、妻と田畑を見に行くことも行っていた。自宅での家事などは殆ど妻が行っていた。数年前よりアルツハイマー型認知症の診断を受けていたが、日常生活に支障はなく過ごしていた。脳梗塞発症後、急性期・回復期病院を経て療養病棟に入院し、退院後は在宅生活とショートステイを繰り返し利用されていた。

【作業療法評価（役割作業の再獲得前）】無口な性格や発話が乏しい為、観察評価を中心に行った。日中は、排泄介助や徒手治療による介入では特に強い拒否行動が見られ、「あんたに用はない！」と易怒的で職員の腕をつねったり、暴言様の発言も多くみられ複数人でのケアとなっていた。また、昼食時以外臥床傾向であった。病前は新聞を読んだり外を散歩したりしていたと妻から語られ実施したが、継続的な作業従事には至らなかった。身体機能は基本的動作に軽介助を要していた。

【経過：ショートステイ利用時（退院から8ヵ月半の間）】CLと関わり約1年経過し、妻から、「CLは書く事は嫌いだったけど、手の運動も兼ねて名前を書いてみたら綺麗に書くことができた。そういえば自宅では、ゴミ回

収日は忘れずその日に合わせてゴミをまとめて、ゴミ袋に名前を書いて出していた。」と語られた。この語りから、病前役割作業でもあった「ゴミ袋への名前書き」を提案し実施した。作業中、自らマジックを手にする、落ち着いた表情を見せるなどの姿が見られた。妻は「お父さん助かるよ。書かないと（ゴミが）帰ってくるよね。」と話され、CLは「うん。」と頷いた。またCLはOTに「（作業を行えて）ありがとうございました。」と話され頭を下げた。病院では、作業実施を目的にベッドから離床する機会が増え、基本的動作も見守りで可能になるなど身体的にも改善がみられた。妻から「すごいね。（ゴミ袋への名前書きの）作業をやって良かった。今の所、前みたいに手がでる事が減った。これといって役割はないと思っていたけど、私の仕事が減るし本当にありがたく思っています。」と語られた。

【作業療法再評価（役割作業の再獲得時）】身体への強い接触には拒否は残存しているが、職員への拒否言動は軽減し穏やかに過ごされるようになった。排泄介助は職員1人でも行え、協力動作も得られるようになった。日中の臥床傾向に大きな変化はなかったが、作業従事の際には能動的な動きもみられた。

【考察】CLは意味ある作業を語ることが難しく、妻からの語りを手がかりに作業を模索した。今回の作業模索の過程において、「字を書くこと」を自宅で行っていたが、これは手指の運動や脳機能賦活など身体機能の維持向上が大きな機能・意味となっていた。一方、「ゴミ袋への名前書き」という作業には、安心して生活できる自宅環境を維持すること、妻への援助、役割作業従事による存在意義などの機能や意味があると考え。つまり、後者の作業には使命感や責任感の意味が加わり、CLに作業的ウェルビーイングの経験を促せ、病前の様に落ち着いて生活出来る一助になったと考える。

【文献】続・作業療法の視点 - 作業を通しての健康と公正 -. 大学教育出版, p97, 445

作業科学研究, 10, 114-115, 2016.

Promotion of occupational well-being by writing a name on garbage bag

Kodai Aruga, Isao Kurata
Kamiinaseikyou Hospital

【Introduction】 Occupational well-being is dependent on health (Townsend2011). Finding value in an occupation and engaging in an occupational role with the help of an occupational therapist (OT) and spouse through client history promoted a feeding of occupational well-being. It provided an opportunity to find meaning in an occupation, and to formulate a progress report. Here occupational well-being was defined as the feeling of satisfaction and meaning after performing a particular task in daily life. The client and his family provided informed consent.

【Client information】 The client was a male in his 80s who lived with his wife. In his youth, he worked for a company and a farmer after his marriage. His was generally quiet. Recently, he was mainly indoors, but ventured out to look at the rice fields with his wife. A few years previously, he had been diagnosed with Alzheimer' dementia, but his life had been unimpeded. After discharge, he had repeatedly used short-stay facilities.

【Assessment (before occupational-role acquisition)】 I mainly performed an observational assessment. Toileting assistance and care were accompanied by strongly resisted by the client. Other than lunch time, he had a tendency to lie in bed, whereas before the illness, he used to read the newspaper and stroll outside. However, on discharge, he was unable to do this without assistance.

【Progress: the use of short stay (8.5 months)】 Approximately 1 year later, his wife said that although he hated to write, he was able to write his name neatly as an exercise. Because he never failed to rearrange and bring order to the house and regularly took out the garbage. I suggested that his occupation should be to write his name on garbage bag. He eagerly took to this task and exhibited a calm expression. His wife said that he greatly appreciated this task, and the client himself nodded bashfully and “thanked” the OT and his wife. Therefore, opportunities for him to move increased. His wife observed that he had calmed down, and I appreciated my

work had decreased his stress levels.

【Reassessment (after occupational-role acquisition)】 The client became more cooperative with the staff, was calmer and eagerly engaged in the occupation.

【Consideration】 It was difficult for the client to express his ideas of a meaningful occupation and clues had to be derived from his wife' s story. At first, he wrote a character at home. Maintenance and improvement in bodily functions such as exercise and brain function are required for activation of the hand. For the client, writing his name on the garbage bag was a function that signified help and engagement. In other words, the particular occupation of writing his name on a garbage bag provided the client with a sense of duty and responsibility and occupational well-being to live life as calmly as it was before the illness.

【Reference】 Enabling occupation 2: advancing an occupational therapy, vision for health, well-being & justice through occupation p97, 445

身体障害者における退院後の調理の意味の変化

清田 直樹¹⁾, 齋藤 さわ子²⁾
1) 茨城県立医療大学付属病院
2) 茨城県立医療大学

はじめに：作業の意味は文化が大きく影響するため、それぞれの国で研究が必要であるとされている (Hoking et al.2011). 調理は多くの人がある役割を担ったり興味を持つ活動であることから、回復期病院では多くの患者で調理の再習得のため作業療法介入が行われている。しかし、ある程度調理を再習得しても、退院後、調理をしなくなる人は少なくない。その理由について、調理の意味やその変化が関係している可能性があると考えられているが、調理の意味に関する国内の研究は少ない。特に意味の変化の有無やその内容を理解した研究はなく、十分な知見に基づき作業療法介入が行われているとは言えない。そこで本研究では、回復期病院入院中に作業療法で調理練習を行い、調理を自宅復帰後に再開する予定の、同居家族のいる、身体障害を伴う6名の退院時と退院1か月後の調理の意味の変化を理解することを目的とした。

方法：研究協力者は男女6名であり、全員が発症から

6ヶ月未満で自宅に復帰した者であった。半構造化面接を用い、調理の意味(価値、感情、信念、知識)について質問をした。面接内容はICレコーダーにて記録した。データ収集は、退院時と退院1か月後に実施した。面接で得られた音声データから逐語録を作成し、比較継続法を用いて6人全員が説明できるモデルを作成した。なお、本研究は、茨城県立医療大学倫理審査委員会および茨城県立医療大学付属病院において審査を受けて承認された上で実施した(茨城県立医療大学倫理審査委員会承認第361)。

結果・考察：本研究の6名の研究協力者が語った退院時から退院1か月後の調理の意味は、変化しなかったもの、変化したもの、および新しく出現したものが抽出された。なお、分析結果の調理の意味カテゴリーは【】、サブカテゴリーは《》、で示した。変化しなかった意味は、【**伝統の継承**】、【**役割**】《**分担してもいいもの**》、【**家族の満足**】《**夫と子供の満足**》または《**妻と子供の満足**》であった。また変化した意味は、【**役割**】《**全てを担うもの**》から《**分担してもいいもの**》または《**二人で一緒に行くもの**》への変化、【**家族の満足**】《**夫の満足**》から消失、【**健康への配慮**】から【**疾患予防**】への変化または消失であった。新しく意味が出現したものは、【**体の調子のモニタリング**】、【**生きるため**】、【**自分ができることの一つ**】であった。

調理に【**生きるため**】、【**自分ができることの一つ**】という意味があることを示した先行研究はなく、回復期病院から自宅復帰し1か月経過した協力者特有の意味である可能性がある。また、本研究で理解された退院後1か月後の調理の意味の変化や新しい意味づけは、障害を持ちながら調理という作業の再獲得を目指し、再参加を行う人を理解し、支援するのに有用な知見だと考える。結論：本研究により、回復期病院で入院中に、作業療法で調理練習を行い、退院時に調理を自宅復帰後に再開する予定にしていた、同居家族のいる、身体障害を伴う6名の、調理の意味の変化の有無と先行研究とは異なる意味が理解された。

文献：Hocking C, Clair VF, Bunrayong W. The meaning of cooking and Recipe Work for Older Thai and New Zealand. *Journal of Occupational Science*. 9,117-127.

作業科学研究, 10, 115-117, 2016.

Transformation of meaning after discharge in clients with physical disability

Naoki SEIDA¹⁾, Sawako SAITO²⁾

1) Ibaraki Prefectural University of Health Sciences Hospital

2) Ibaraki Prefectural University of Health Science

【Introduction】 It is necessary to research the meaning of occupation in every country due to the large influence of culture (Hoking et al. 2011). Many clients have an interest in cooking and it is used in occupational therapy intervention in recovery phase hospitals. However, after discharge, the number of clients who continue cooking decreases. One possible reason for this is transformations in the meaning of cooking, but there is little research about this. Therefore, there is insufficient information on the usefulness of occupational intervention in this area. The purpose of this study was to understand the transformation of meaning of cooking among six participants with physical disabilities undergoing discharge and among the six participants one month after discharge. The participants all returned to their families and intended to restart cooking and engaged in cooking practice in occupational therapy in a recovery phase hospital. This research had the approval of the ethics committee of Ibaraki prefectural university of health sciences hospital and Ibaraki Prefectural University of Health Science

【Methods】 The participants were one man and five women, who were less than 6 months from onset of their conditions. The interviewer implemented semi-structured interviews about the meaning of cooking (values, feelings, beliefs, and knowledge). The interviews' contents were transcribed after recording with an IC recorder on the date of discharge and the process was repeated one month after discharge. The interviews were transcribed verbatim from the audio data. The constant comparison method was used to create a model for the participants' transformation of meaning.

【Results and Discussion】 Six participations of this study said that one-month after discharge, new meanings of cooking were created, meanings of cooking were transformed, and meanings of cooking did not transform. Categories of the meaning of cooking showed “ ” and

sub-categories was ‘ ’ . When the meaning was no transformation categories included “continuing traditions” , “Roles” ‘separation of roles’ . Cases of no transformation also included “Satisfaction of family” which included ‘satisfaction of husband and child’ and ‘satisfaction of wife and child’ . Transformations of meaning included within the “role” ‘take all roles’ becoming ‘separation of roles’ and ‘sharing of roles’ . Other changes included ‘satisfaction of husband’ disappearing and “the health considerations” category disappearing or becoming “disease prevention” . Emerging meanings included “monitoring of physical condition” , “for survival” , and “the one thing I can do by myself” . These findings may be a useful construct for exploring the support, participation, and rehabilitation of clients with physical disabilities. 【Conclusion】 This study attempted to bring a deeper understanding of transformation of the meaning of cooking among six participations with physical disabilities in a recovery phrase hospital.

【Reference】 Hocking C, Clair VF, Bunrayong W. (2011). The meaning of cooking and Recipe Work for Older Thai and New Zealand. Journal of Occupational Science. 9,117-127.

急性期病院における在宅復帰予定クライアントが感じる作業遂行と「リハビリ」に対する作業的見解 -SOPI の評価から作業的不公正を考える -

安田滋至¹⁾ 射場靖弘¹⁾ 松本浩実¹⁾ 萩野浩¹⁾ 松下久美¹⁾

1) 鳥取大学医学部附属病院

【背景】急性期病院では在院日数の短縮によりクライアントは早期に自宅退院, または転院となる. 退院後も「健康」な在宅生活がおこなえるように急性期病院での限られた介入期間においても在宅での Quality of life (QOL) を考慮した作業遂行への評価介入が必要である.

【目的】急性期病院における在宅復帰予定クライアントを対象に Self-completed Occupational Performance Index (SOPI) と Functional Independence Measure (FIM) を評価し, 作業遂行と ADL との関連性と作業遂行の特徴を検討すること, さらにクライアントが「入院中のリハビリ」をどのように感じているかを評価し, その特徴

について考察をおこなうことである.

【対象】平成 28 年 6 月～ 8 月に当院入院中で作業療法の指示があった在宅復帰予定が決定しているクライアント 11 名 (男性 8 名, 女性 3 名, 年齢平均 68.9 歳) を研究対象とした. 疾患分類は脳血管疾患 4 名, 整形外科疾患 4 名, 呼吸器疾患 1 名, 循環器疾患 1 名, がん 1 名であった.

【方法】基本情報はカルテより抜粋し, SOPI, FIM, 質問については担当作業療法士が評価をおこなった. 評価時期は, 今後の方針が在宅退院と医師からクライアントに示唆された以降におこなった. 得点基準として, SOPI のそれぞれの項目で満足と評価し, 100 点換算した場合の最低点が 50 点となる為, 今回は基準点を 50 点と設定した. 併せてリハビリに対するクライアントの視点について, 主訴や目的について質問をおこなった. 質問時には, 作業療法士による作業遂行への具体的な目標を示唆する以前のものとする. 統計学的分析では SOPI と FIM との得点関連性について, Spearman の順位相関係数で相関係数を求めた. 危険率は 5%とした.

【倫理的配慮】口頭において, 趣旨の説明およびデータの開示, 不参加・途中棄権の自由, 不利益の生じない事について説明し同意を得た.

【結果】運動 FIM は平均 73.3 点 (91 点中), 認知 FIM は 31.6 点 (35 点中) であった. SOPI の得点は, 中央値 33 (最大値 69 最小値 0) であった. 50 点以上は 2 名, 50 点以下は 9 名であった. 50 点以上の 2 名は脳血管疾患, 整形外科疾患のそれぞれ 65 歳, 55 歳のクライアントであった. SOPI と FIM の相関については, Spearman の順位相関係数にて $r=0.018$, p 値 $=0.957$ と有意な関連性はなかった. リハビリについての質問回答として, 50 点以上の 2 名は身体機能の改善と作業遂行全体に対して目標があった. 50 点以下の得点者は, 身体機能の改善とセルフケア改善のみの回答であった. さらに「したい事が見当たらない」, 「考えられない」, 「したいけど出来ない」といった回答があった.

【考察】作業公正とは自身と社会にとって意味のある作業が出来る状態を指し, 今回, 多くのクライアントに作業的不公正が生じていた. そして, SOPI の得点の高さと FIM との得点の高さとの関連性はなかった. SOPI の得点が 50 点以上のクライアントは作業遂行全体を捉え, セルフケア以外での今後の目標や入院前からの作業への関心が保たれていた. つまり, 作業均衡が保たれ作業ニードが明確である事が得点の高かった要因とし

て考えられる。50点未満のクライアントは身体機能やセルフケアのみへの関心と併せて、おこないたい作業が「見当たらない」、「考えられない」、「出来ない」といった作業的阻害、剥奪、不均衡といった不公正が生じていた。その理由として、疾患や加齢に伴う身体機能の変化に対して作業が移行出来なかった点や、その移行期にセルフケア以外の生産的活動や余暇活動面へのリハビリ介入がおこなわれていなかった点、おこないたい作業に対して病院や家族などの環境因子により作業が制限された点が要因として考えられる。急性期病院では、リスク管理を含めた身体機能・ADL訓練はとても大事な訓練である。しかし、クライアントが在宅での「健康」な生活を送る為には以前の在宅生活に戻るだけでなく、作業遂行領域について評価し介入する必要がある。

作業科学研究, 10, 117-118, 2016.

Occupational performance and opinion of rehabilitation in patients scheduled for discharge from an acute hospital - Occupational injustice assessed by SOPI-

Shigeyuki Yasuda¹⁾ Yasuhiro Iba¹⁾ Hiromi Matsumoto¹⁾

Hiroshi Hagino^{1,2)} Kumi Matsushita¹⁾

1)Tottori University Hospital

2)School of Health Science, Tottori University,
Faculty of Medicine

【Background】 From the point of view of medical economics, patients admitted to an acute hospital have tended to be discharged early to reduce their stay in hospital. However, occupational therapists cannot provide therapy to patients for long periods during the acute stage and therefore need to assess the influence of occupational performance on their quality of life (QOL) following intervention therapy and discharge.

【Purpose】 The purpose of this study was to clarify the relationship between occupational performance assessed by the self-completed Occupational Performance Index (SOPI) and activity of daily living assessed by the Functional Independence Measure (FIM). We also assessed the characteristics of patients admitted to an acute hospital who carried out self rehabilitation.

【Subjects】 Eleven patients scheduled for hospital discharge

on either the doctor's decision or their own opinion were eligible for the study (8 males, 3 females, mean age 68.9 yr). Four patients had suffered a stroke, 4 had musculoskeletal disease, 1 respiratory disease, 1 cardiovascular disease, and 1 cancer.

【Methods】 A SOPI score of 50 was used as the cut-off point in this study because it corresponds to limited patient satisfaction. Questions on the patient's main complaint and their goal for rehabilitation were answered verbally. An occupational therapist asked the questions before giving a specific goal for occupational performance. Spearman's rank correlation coefficient was used to analyze the relationship between SOPI and FIM. The level of significance was set at $p \leq 5\%$. All participants provided written informed consent and the study was carried out according to the guidelines of the Declaration of Helsinki.

【Results】 The mean FIM score was 73.3 for motor and 31.6 for cognitive function, while the mean SOPI score was 33. Two patients, one aged 65 yr with a stroke and the other 55 yr with musculoskeletal disease had a higher score (> 50), while 9 patients had a lower score (< 50). Spearman's rank correlation coefficient showed no significant difference between SOP and FIM ($r=0.018, p=0.957$). Two clients with a SOPI score > 50 set a goal for occupational performance and their own physical function recovery. In contrast, clients with a SOPI score < 50 only had a goal for self-care in ADL and negative responses.

【Discussion】 Considering all occupational performance, patients who had a higher SOPI score had the capacity to maintain an occupational balance and had determinate goals for daily living. However, the other group had limited goals for physical function and self-care. We suggest that situation represents occupational injustice. We speculate the reasons that patients did not have an occupation may have been due to impairments associated with disease and aging, or they could not perform their occupation in a limited environment like a hospital. In addition, the patients may not have received occupational therapy for leisure and production activity during the period of their hospital admission. Occupational therapists should assess and intervene in the occupational performance of patients in acute hospitals, not only to establish their pre-admission living conditions, but also to maintain healthy living.